古今狂歌人物誌

鈴屋翁類輯編

全

1256

へ本19
1256
巻

松平氏藏書記

石田未得

石田未得ハ通称を又左衛門といひ東都両替町に住せり〜〜故ありて相州小田原に移りすみ生涯髪を剃くまゝ東都に帰り薙髪して名を未得とよびり狂歌をたしなみ当時の養未得と並び称せらるゝ慶安二年自詠の狂歌を集めしその十巻を印行せり或吾吟我集といひて今に斯道の珍籍とせり其後松見貞徳の門に入り狂堂と号し〜〜能諧を能くせり寛文九年七月十八日八十餘歳にして歿す浅草誓願寺に葬る法号を「自性院未得居士」といふ

一本亭芙蓉花

東京帝国大学図書

芙蓉花ハ浪花の人也通称を平野屋清兵衛といふ由緣齋貞柳の門
人にて狂歌に名あり別号を花閑楼といふ後年江戸に来りて浅草の
観世音の堂内に自ら宝珠を画き〻絵馬の額を奉納せり その賛に
みろくてらこころふとあけ光るほうせう祈るさとをののむとを
とあり〻〻の人にや一首の落首を〻〻り
みろくてもこころふとあけ光るほうせんかの狂歌の性根ぞてハ
天明三年正月廿六日歿に享年六十三歳浅草西福寺に葬る

市場通笑

通笑姓市場氏名八寧一字八郎通稱を小倉屋七平次といふ樽
雫と号し江戸横山町に住〻〻骨董物を販きて業とせり又経師屋を
もなせりかゝる草双紙の著作を形〻〻安永年中より寛政の初に
数多の冊子をなせり〻〻甚作意ありて教訓を旨せり故世人呼んで
教訓の通笑といへり文化九年八月廿七日歿せり享年七十四歳浅草
松葉町(元新寺町)祝言寺に葬る(法号)覚法全心信士

白鯉舘如雲

如雲ハ本國伊賀より生國ハ武藏也姓木室氏にて名ハ朝忠通称を初め左左衛門といひ後に七左衛門とかへ元旧幕府の士にして高禄百俵四人扶持を賜ふ元来能諸を好みて二鐘亭と号せり後に當時流行の狂歌師白鯉舘如雲と稱せり本所お竹町に住せりをとて拙因を本所側といふ後年神田明神下に移り住む其先ハ天正十年六月明智光秀叛逆して織田右府公を本能寺に殺せり時徳川家康公ハ泉州堺に滞在ありてこの変を聞くまひらに本多忠勝の忠諫を容れ帰国し決し伊賀國柘植村よりて此とき鹿伏兎越之策因小し

しを腹切半蔵幸長忠勝の命を受け伊賀の郷を募るに馳せ集る者二百人と及ぶ小世話りて後この二百人を召連れ腹切半蔵組下と附られ(この二百人を世に伊賀者とふ然れども同じ伊賀者の内にも所の風格大に異なる者あり原蓑様伊賀者臣蓑中様伊賀者山里伊賀者八兵衛代に小夢清方伊賀者八兵衛代伊賀者八總る持高勤に非ぬの方八三十俵二人扶持(二十俵二人扶持の後)知雲の家祖八此伊賀者にて本宮蒲治といひ慶依免許之安未因者のさ人に本宮蒲右忠の都居り家系は天正十年伊賀越御供と見えたれ御譜代伊賀者にて知雲八伊賀者にて臣徒目付に選ばれ寛永六年正月廿五日臣目見以上小夢清方(改役

東京帝國大學圖書館藏

昇進にまさ何る侍臣裏門切手番頭真方小平次の跡役を承ひ
ま叶まに日壁小左衛門と小左衛門付られ(その時知雲り
述懐の狂歌
けふ命拾ひふるを尤さ祝ふこの行くところ(日壁小左衛門
千歳を久しく小夢清方にて年を老行くまを見て赤く彩りれハ
ろ(ふく頭の赤きこれあれハ蓑のかしらよ彩さうふたの
と詠しこの歌執政の臣列座よ聞えて殿く臣屋敷番の頭よふ
りしとふ(鬱とふ鳥ハ首赤くして全身黑き故かく詠しこ)
まさ曽て風来山人(平賀源内)一種の梯を製しを世よとてたゞ
されし付知雲られを風しを

敵てきて岩おみせのおくの際ハ仕あ〜の柳をまゝ〜苦く

と詠て風来山人よ送り〜よこの時風来山人の返歌よ

かゝることさ何とせんアのこまゆ屋伯乗をふこゆつらひをふし

かくの如く知雲の最を古く狂歌よ安えてり歌集を今日狂歌

集といふ「狂歌年代記」よ天明三年十二月歿ととなれとゆ〜

うくかハ〜きふ〜ゆり慶尾天源寺よ葬ふといひまゝ四谷西念

ちよ葬ととをいふ説ゆりて友所とを尋ゆれとを詳あふ〜と

を〜もつきとゝ

辞世の歌よ

昔ハ屋ゆ裕ふれいさもゝ世の中よりと殆ら〜死ぬをあさみ

東京都立図書館

花道津良根

花道ゆゝ祖ハ五代目市川団十郎の狂名也四代目海老蔵の実よりて

幼名松本幸蔵といふ宝暦四年九月ゝて初舞台をつとめ同年冬父

の元の名松本幸四郎を継き能名を男女蔵といつり明和七年五代目

相續〜て團十郎とゆくらめ三年と号ハ寛政三年ゆよ六代目團十郎を譲

りて鶴蔵と改ゆ白猿と号ゝこの時白猿の口上よ「祖父海老蔵の文字を分

ゝ〜ゆ私ハ元びざこの鶴の字を用ひまゝハ祖父ハ柏莚父ハ五粒私ハ

白猿と書て白猿と申〜まゝるこの心ハ名人上よよ毛ゆ三筋足らぬと

申儀で候然ゆ外云とまゝ歩白

毛ゆ三筋上ゝまゝ足らぬ上ゝて公義ゝ

伎藝百芸学品行共よ備りて我ら国よ非優多〔とい〕へども立皆白猿の
右よあるこの形〔常時最を文華の盛んなる〕時そ蜀山飯盛真顔
京傳馬琴ふへとの諸名流と交りたつ〜最を書画を能く〜彼の
「錦著て寒のうへの色食弘の味を思ひてをそろ不識を知るよ〜〜」
當時馬琴の著「武子名而号絵」よ江戸の皐とたりて
江戸ハそハ外よ名所も多うりり国十郎のも多の三月
とあ〜〜〜まても世よ名高きを我知る〜〜寛政八年五十六歳そて
牛鳴よ宗居〜て名を七々思つとたふ〜〜むこの年一世一代の奉納めそて
おもふ〜時ちりてこそ世の中の花もを多り皐をそろし
然るよ寛政十年中村社頭不毋狂云よ止るき事情たりて再ハ出勤

東京帝国大学図書館蔵

毎日日上を涙〜相歌一首ツを添むと後を義理よ迫りて三度まて勅
せ〜とたり宮和三年金〜三百納〜て牛鳴よのうれ奢をそろき一ヶ月の費
用金二歩と定め庵よハ天井を法ふ草家根の裏たるまた足ものとも
少〜を飾る所ふ〜ろ歩閑よ風月を友とて楽〜めりとふ退隠の時
我ら庵ハ芝居の辰巳ちをすむ世をう〜鳴と人々いふ多り
函ハ楽よ咸田の不動そんとくのうき世の世話ハ〜ふ〜〜
世を於て友達多く多るよけり月雪花よ山市〜〜〜〜
草庵の壁ニ西の内の紙よ弥陀如来の印影を画きて張付その傍よ
一夜のかミのこゝよハ生れ来て法ひよハ〜〜〜〜の内ら多
と書つけ〜とふ白猿狂歌集（一名友形〜猿）念仏百首等の著書

ばり文化三年十月晦日歿す享年六十六歳芝増上寺地中常照院(百
ん堂)に葬る法号「還誉淨本菩薩法子」といふ其歿する前日
「ホからしよ雨とつ雲の行くゑ」と口吟しうたを歌ふと辞世とハ彼
りしといふ

腰唐秋人

腰唐秋人姓中井氏にて名ハ敬義字ハ伯直小笠と号ス通稱
を嘉右衛門といひ本町弐丁目に住し俳名を乙平と呼ス狂歌ハ大屋裏
住の門に出ひ腰唐秋人と盛号ス然れとも後年狂歌を廢し
て書に最も能筆にして安永天明の比世に稱美せられ萱堂敬
義の名海内に鳴る常に諸侯に招れて尊敬せられしうたを

東京都立中央図書館蔵

主家金吹町播磨屋新右衛門方へ通ひたるもの壮年の時より一日も
怠ることなく雨風のひとしきりも無服を身にまとひ引くるくるをすきを
通ひ」といふ世に書家たること四ツさかれ名家なれとも家を尊むも
とかくのめしまつる方雅き去形りと當時人々ほめあへりといふ文政四
年七月廿六日歿ス享年六十四歳築地西本願寺淨見寺に葬る法
号「教善禪定門」といふ

馬場金埒

金埒ハ姓馬場氏にして大坂屋甚兵衛と通稱ス数寄屋町弐丁目
に住し狂歌に鐵屋金埒とも馬場金埒ともいひ別号を清州樓と
いひ狂歌堂真顔と最も親く交り當時狂歌四天王の一人に数へられ

たり

雪形ハいろう酒代を祈ぶ花のつぎきの志賀の山駕

この歌のくりもさそとき桃をまよ夜かくよゆらく玉味噌

られぶの歌世まとそう文化四年十月十日歿す享年詳ふらん

芝金杯常瑞寺ニ葬ル法号「釋淨清信士」といふ

濱邉黒人

黒人ハ本芝北丁目ニ住せし本屋の主人にて通稱を三河屋

半兵衛といひ老後剃髮して蘆を黒く染め道服を着しうり

當時蘆までの黒人と仇名せしといふ又其比元亞細亞美男まと

常ニ居士衣を着て紫の服紗ニ色ミしを背負てありきしゆえ

東京帝國大學圖書館藏

亞細亞ハ兼好を一ぱん湯ぎきしてゆうこ黒人ハ文学を油揚ま

ゆう如くしとくこいひなりしとそ今よりてまて狂歌ニの花といひ

て題料をおすハこの黒人ニゆう始まりといふ寛政二年十月十八

日歿す享年詳ニ辞世の歌ニ

黒人ハ黄色の人よふんとて濱辺を拾て川ぎしゆく

麻布古川端光林寺ニ葬ルといふ

花江戸住

姓ハ山口通稱を政吉といふ銀座北二丁目ニ住ル早く狂歌を詠く

初め霞谷蔭といひ後ニ花江戸住といふため別号を茅屋

亭といふ四方側の判者ニ

新宗風を標し柳を浸きつけて澤辺の蟹や兎を棲くらん

月新し將棋をさせい窓の虎を一枝もづる秋の中の車

これらの歌世を去るこゝろ文化二年六月歿す享年不詳谷中宗林寺に葬る法名

俳諧寮蝙蝠

姓和田氏にして名定記通称を初め忠次郎といひ後に新五兵衛と称ふ江戸幕府の士にして本所相生町に住居家禄八俵蔵米百俵三人扶持を賜り仙石弥兵衛の邸下にて出勤せ也狂歌に本所側白鯉館の社中にて俳諧寮蝙蝠はその狂号形り老後蝙蝠老人または蝙蝠翁といへり（一説に老後白鯉館知雲の名を継しとも云ふ）文政十三年三月廿日歿せ享年不詳辞世の歌

月くもるもおのれう歌をいまはとてそのまゝにこそいそく雲かな

小石川伊勢町（田七軒町）浄土宗西岸寺に葬る法号「明心院殿誠誉蝙翁居士」といふ

林屋正蔵

林屋正蔵は林泉と号し江戸の人也三世鹿野武左衛門の名を継ぎ世に名高き落語家にして殊に怪談ものを得て己が道の奉斗と仰られ今日にいたるまで其伝統のこりて怪談の元祖とあふぐ人多し寛政年間より狂歌を詠ず義を主節を貴く

しかりまゝ戯作をこゝ彫りて著作なりこれ天保六年雛
髪しそこの時林泉と号せしかり又再び旧名に復し天保十三
年六月九日歿せ享年不詳（諸書に天保十二年二月歿せとなる
ハ非也）是より先正蔵病危篤彫りしかハ親族に遺言し
て我死ふハ火葬にせとこゝつ依る家人その言に背ひ辺に
送りて柩に火を点せしに忽ち中天にそゝきて流せさま
じき物音しくれバ人々大に驚き耳をおほひてあゝずみしに
柩中より星光きらめきてえもいそれぬ匂ひさへさしたる人こ
もゝ彫りて棺に近つきたゝためえしに柩の中に烟火の設
けなりしをこゝて一時に音を発し星光のさゝ発しに彫り

東京帝国大学図書

といふ流石に怪談の元祖にて死後にいたるまて絶くこの怪を
演じて人々を驚かせりと告人（蜜）なりしとふ浅草
今戸稲荷際浅草養寺に葬る法号「諦林諦正善男」といふ

八景園 梅村芳方

梅村芳ハ姓久間氏にして名ハ盛光幼名を金五郎といひ安政四年
十二月廿五日牛込細工町の家に生る世に徳川幕末にて小十人をつとむ其ハ
表兵衛と称し三勤定役留物方を勤む母ハ家女彫りに早世せ
しをこゝて祖母に養育せらる天性孝順にて老父に事ふるを千秋一日の
如く又病蓐にありし時ハ薬餌に手ずから自ら尽をこゝろ餘人に
更に偏せしめしとかり常に好て軍学法書を講じ

時に文事に心をゆる禄最も狂歌を嗜み、当時雅友と謀りて石蓮といふ
を称し自ら長と称し、曾て小石川善仁寺本堂（今比丘寺の僧侶皆
門弟なりといふ）にて、この雅友をはじめ狂歌百物語といふ會を催し
終夜狂歌百首を詠ずといふ天保十年中人組頭に昇進せしより少しく
悔る所ありて、をりて石山連を高輪幸亭春多西に憚り、後にこれを
碑連と稱し、門下に豊の屋、江戸の屋、文常等の名ある者別者
にて、嘉永六年七十九歳にて役所免を願ひしに多年勤續の賞と
して黄金三枚を拝領せられ、世をのがれて月花に心を寄せ狂歌をと
なへ、安政三年八十二歳の時年内立春を題して
来る春日永のとけき新玉とひきのふをとる年ぞうれしき

まつ同じく年の節分に
豆まきて今年老いぬすきうとぶ悔るそ
安政二年十二月廿日の夜、子梅樹園を勝近に招きていはく、余多年
狂歌師として、数の狂歌を詠ずるに、いまだ故あらざるに
世俗白を口吟ずるとて示せるに
梅の香や邪婦の川むらふ
この白梅の香を慕ふ情いと深し、いとも甚敷の何とかく湧
げ形りの果て、其日八ツ時比巨燈を点ぜ、世に眠るが如く去れ
せりといふ、古今年八十四歳、辞世の歌
とゝ数多ふるかな四辺よりとをるかき世にてやすきをぬひそへん

小日向臺町清巖寺に葬る法号「石山院殿觀海潮音居士」

因まふ伊予松山藩一の名園雲水亭は年ふりし梅樹を

これを世の行梅と稱し由緒ある事なれば毎年十六日より花

開くといふこの梅のもとにたのめき八条園の狂歌を記すいふ

既字 なりしを殺存するといふ

又毋いまだときまの出の梅樹を移のもとにうゑ植えた

この碑は八条園の甥ふら八十鳴鏡三郎の孝行梅を頌したる

慶應の比いと殺こ建しものなりといふ

梅樹園 魁花芳

魁花芳は別号を梅樹園といひ八条園の男にして姓は久間氏名盛三郎

通稱を佐兵衛といふ文化六年二月十日中川久保町の家に生る篠田新左

衛門の門に入り大槍流の学を学ひ文耕堂薫山の号を授らる十八

歳にして師の名跡を継き子弟を教授す天保の初め大臣番へ召出され

付武術を励ミ将軍大的上覧の時見事に命中せし賞として時服二重

拜領せしといふ若年の比より和歌を小林歌城翁に学ひ歌を以て狂歌

の教をうけ十四才のとき始めて狂歌の会席へ初めて出詠す尚歌

の題に会席の出唱といふ

出唱のその会席まで捻くみの出詠ぶりのこと第五章

と称し一つ点を得しといふ明治維新の後梅翁と称し鈴木重頼大

人に勧て和歌をよみ梅翁百首の著作近年狂歌の上手と稱せらる年

迎和山伏町に小学校を建設して校せたること廿餘年に及ぶ明治廿年
四月三日歿す享年八十五歳小日向臺町清巌寺に葬る法号「秀玄
院殿壽徳棋翁居士」といふ

梅亭金鵝

梅亭金鵝は姓瓜生氏にして名は政和通稱を熊三郎といふ父は柳剛
流の剱客にして吉田勝三郎と稱せり金鵝は文政六年三月廿日安國藥師
堀の家に生る則二男なり早く劍道を修め天保七年伊勢路より其近國を
武者修行して四十年江戸に帰り谷中初音町の道場に在りて弘化二年歿
す瓜生の養子なりし郷附木店に住せしそれより浪文人等に多く交りて
いとゝ劍に武藝を慶し文学に志を寄せ嘉永の初年友人服部應賀

に伴れて下谷池の端に住せし松亭金水を訪ひ戯作に至ることを勧せ
遂に金水の門に入り金鵝と号し板下筆耕を業とし かたはら著作に
筆を染め一日書肆某訪ひ来りて戯作の著作を求むるに任せ直に
稿を記し持て上せつゝ是を滑稽作者の名を博せり一世の呼ひものの
なりしが此林話七編人にて題する世にもてはやされつゝ又ある年友人
七人を集め佛の交際といふ題ひを催しつゝ七幸の園よりの〳〵佛の名を
記し詩を抽き釋迦に當りし者は釋迦の風姿をして總て佛
語を用ひ根岸の梅園に七人うち寄りてあのこ〳〵佛に寄みて狂歌を
詠ぜしめしとこゝに金鵝は西部祝部にして

うちつれて西安婆の梅をみて是れは我極楽の蓮はなのうは

と称し、ときに喜美雄苑又、嘗渓隠士等の号をつけて人情本を著す。明治の初年小石川白山蓮華寺坂の邊りに居を移し、白山人とも号せり。明治十年国会弥開の近者とあり一世の滑稽を吟ぜし。同十四年同社を退き遂に明治廿六年六月廿日高年七十三歳浅草永住町稱念寺地中最尊寺に葬る。法号「清受院釋某得浮生居士」といふ

花の屋蛙麿

蛙麿は姓岩本氏にして名學字吾心法齋又号物と号せり通称を五一といひ連麿屋と家号を呼びて日本橋四日市に古本を鬻ぎて業とし、かたわら文学を素ひ和歌を詠て花の屋蛙麿と稱し

後年芝日蔭町に移りすみ明治元年七月十八日高年五十二歳にて歿す。市谷一ツ木浮土寺に葬る。法号「學阿弥陀定門」

花笠文京

文京は姓東條氏、名未甫字文京通稱を魯助といふ。元祿後高田藩の醫師東條某の男にして儒者東條琴臺の兄。幼時より父の業を承ひ家を捨て諸國を巡り後江戸に来り柴井町に住し書籍を販きしが其後日本橋室町に移り狂言作者鶴屋南北の門に入り勝俵藏といひ、次に其門より花笠魯助と稱せり。生涯浅草茅町に移り代作屋大作といひて文章の代作を業とせり。性放逸にして常に分を過きざる者後を極め多く不義理の借財をなして貧窮琴臺と

を義絶せられしゝ生涯貧政の大地農よりして茅町の家をを考ひけれハ
親子四人皆飢餓部須田村の農家ゝ馬小屋の跡なるを借うけ辛く
雨露を凌ゝとふその時ゝ死り〳〵文京の狂歌ゝ

小農ひのかりやゝ形〳〵やを因花ゝいきことかゝ如隅田のかり庵

物ことよ板着せぬすゝこの歌をゝをゝをゝ万延元年三月二日
歿八享年七十六歳辞世の歌ゝ

山の端よゝ雪とゝ〳〵花ハ根ゝかゝ〳〵後のまゝのあけ〳〵

深川天巌寺中ゝ葬ル法号を「曾鈍敬筆」とふ

貳朱判吉兵衛

二朱判吉兵衛ハ本名を中村吉兵衛といひ俳名を一其といつり浜橋町よ
り後の吉原大盡ゝ兼唱歌二十五座の作者ゝまゝ狂歌をもゝ死り山徳
四年俳優ゝありて森田座よ初ゝ兼芸を勤ゝ最ゝも外方ゝ物を浮て
伝附上ゝ吉ゝ〳〵ゝ二朱判吉兵衛といへる名ハ〳〵小男ゝ物ゝ外の諸
人ふゝう故當時能金の二朱判形ち小ゝ物ゝとも伝ゝき黄金ありれハ
これよゝ〳〵ゝ〳〵斯ハ呼ゝとふ板年浅草黒船町ゝ住〳〵幇間ゝあり
大ゝ世ゝもてゝ〳〵ゝ〳〵ゝ宝暦八年ゝ文明ゝ著せ〳〵「當世東都百化物」
ゝ所載の吉兵衛ゝ件いと面白ゝれハ左よ記ス

世上ゝ〳〵ゝ有の中村吉兵衛といふ者ハ、元歌舞伎役者ありしゝ、産

を引て西年、當年八十ゟ近クなれとも、いまゝ心肝肾達者ゟ〳〵、
大名のゝ敷物ゝして、金銀衣服を能ゝて世ゝひ、神ゟ下世話ゟふ
老人のゝゝ化物、法當地化粧のゝ袖頭ゝを可申ゟれハ、
大尾の出頭の初ゟ毒ゝ、先ゟ一酒を過〳〵淫事を犯すこと、五
十年ゟて八其礼防ゟりしゝ、近年淫酒の慎み深く、ゟれゝゝも
心底ゟ少しゝも物を貯ゟゝを形〳〵世の中を元氣ゝ〳〵ゟ故、孝
行力を勤ゝをゟく、今日まゟて目出度化まゟ〳〵ゟ白狐の神
ともゟりまゟき化粧ハ是ゝ

明和二年八月十五日八十餘歳ゟて殺ゟ谷中和音町法華宗常在寺ゟ
葬ゟ法号「深入院宗禪一其日定」といふ吉兵衛の狂歌ゟ載集ゟ

東京樣原藏

日江戸見坂ゟてゝゟりて

八重ゟとゝゝゝゝゝ咲て桜田ハまゝゝゝ花の盛見坂ゟふ

吉兵衛の墓今常在寺ゟふこの事ハゟゟ掃墓餘稿ゟゟゝ

初代小平庵一樹

初代小平庵一樹ハ姓相下氏ゟて名善政通稱を覺之丞といふ後ゟ
ゟて二郎右衛門といふり赤坂一ツ木ゟ住ゟ初代給馬屋額輔の舍弟ゟ額輔故
ゟて奥田氏を継ゟゟゟゟり兄ゟゟゟゟて実家をお継ゟゟゟゟ狂歌を好ゟて
兄と共ゟ蔓江翁の門ゟ在ゟゟ小平庵一樹と号ゟゟ山の手狂歌判者東西南北の
内の一人也（東夷庵古波、西来居未佛、南亭葉々廣、北平庵一樹
この四人をいふ）まゟ小平庵の号ハ赤坂見附を小平居門と唱ゟゟゟゟり

一樹の屋所一ツ木より因名りとそ文政十年八月四日歿へ享年四十一歳赤坂
一ツ木町法華宗常玄寺に葬る法号「観義院善政日正居士」とふ

初代 日生の屋輝世

輝世八藤原姓にして春孝氏也伊勢國津の産にて通稱を亀屋万
吉といひ十三に勝藏ともいつり若離洲町に住し筆道をもて業と
せ文化の初より狂歌を嗜み初号を花風亭寫待といひ別号を
脇曲庵といつり後に梅の屋の門に入り中町側につゞかり星の屋と
ひ〳〵あ割者となる性寡言にして平日雑談せへ人のわとへハ終ふ
にこゝろのみ常に自〳〵我が師あり古狂歌をとて師とし言葉を先達
より受ふとつり惜むべくハ今歿年月日を詳にせへ谷中瑞林寺に葬る

東京原製

といつとも定かあらへ

本調子 満糸

幸調子満糸八別名を柳園とふ幸姓石川氏にて旧幕臣也名八貞
勝といつり太田某の養子となり太田氏を目す若年の頃より狂歌を好
初代猿馬屋の門に遊ひ文久元年柳園満糸と改名小平連の列なる
列へ老年に至りて和寡翁と稱へ維新の後警部の職を奉し治十年
西南の役に戰地へ赴て負傷し日向國ほそ潟に船繋り
せ〳〵ものゝ慰めとて弱をゝれに一尾の鯖のかゝり
ものゝけき魚を得んと思ひ寡へ生とされあるゝ満のを弱ふ
然定の後法ごとなり改新て在職せしに明治廿三年職を辞し

赤坂田町七丁目に居を定め日比野氏の娘を妻として老を安くせんと心ゝまつべしとて其の翌日明治廿五年十月一日享年空歳をもて歿す山共墓地へ葬る法号「忠山貞勝信士」といふ

二世　星の屋　輝雄

輝雄は源姓なりと山田氏世名英胤通称を云蔵といふ文政五年二月元日生る性狂歌を好み早く初代星の屋の門はいり芦の屋一幸と呼ひ名り世に高まりて江戸浅草町に住し山田氏五世の孫なりといふ其先は大和國福岡の住山田權頭重真といふ輝雄の父は法橋日山といひ名英敬少時より風流を好み又國学に志ありつゝ井上文雄に和歌を学ひ文政延元年歿す輝雄は明治廿七年先師の号を嗣き二世星の屋

と号し本町側の剃者に列し同年四月其披露會を日本橋倶楽部に催し本の星祝といふ題にて輝雄のよこ〜歌に

花の代のいつゝの風をめでゝうれしほ〜の秋のたゝをなつさへて

明治三十二年九月十六日歿す享年七十七歳辞世の歌に

なりはきの恥あはけれとかひなりを孫彦星を尽を焼〜き

浅草高原町（元八幡寺町）日蓮宗中野山大仙寺に葬る法号を「本修院常精日有信士」といふ

平蹲　寅柿

寅柿は大和國郡山の藩士なりを通称を重郎右衛門といふ貞風の能借を能くしを池田氏の名古く世に聞えたりしが後年自流の方合

三百首ばかり狂歌の作名を平辭実柿まさ古田造などといふ東
都の狂歌師の狂名にならはゞよろしくこゝにのこしおく殆年を詳ならず

平秩東作

東作姓は立松氏にして名懐之字子玉東蒙山人また東絃とも号せり
通稱を稲毛屋金右衛門といひ享保七年内藤新宿の家に生る幼名八十郎
後小右衛門と改む父々太郎右衛門と稱して屋敷海西部平塩新田の産
なり元禄十五年江戸に来り享保八年内藤新宿に甲州中馬宿源世
稲毛金右衛門といふ者の株を買受け名称をそのまゝ受継てこの業を
いとなむ東作の通稱を受継ぎ甲州烟草を販ぐ東作十七
の時より川名林助を師として俳諧を修め壮年に及びて狂歌の事

業に大志ありたれども功業なりがたくして止む古く狂歌を師として名聲
海内に高し安永七年刊行せし名を赤穂とかゝむそのはし

思ひ寄をおろし大根のもとけのそばや近つきぬゝん

と詠しといふ寛政元年三月八日享年六十四歳にて歿す市谷まんぢ
う谷善蓮寺に葬る法号「釋宗專」といふ

便々館湖鯉鮒

湖鯉鮒は姓蒲原にして大久保氏也名八百武通稱を平兵衛といふ幕
府の旗下にて牛込山伏町に住禄百五十俵を賜り當時小夢諸
人にて小笠原岩狭守の支配なり早く黄山翁の門に遊び初名を福藤
堂巨立と呼び後に便々館と改む山の手側屋敷の別にまことに名の門前の

まゝにかり法年故ありて茂江翁の門を辞し一度衣鉢の翁の門をのゝその
名ます〳〵世に聞ゆ老後自ら未得翁と稱し曾て口碑に残りし
狂歌一首かり石に彫りて甫笠柏志村四常院境内に建てその所に
三ゝなる来さくいたり〳〵ぬすむ〳〵おとふやく〳〵ふるぬ世の中
文化十五年四月五日歿八享年七十餘年迄て店光照寺に葬る法号を
「便了院殿松巻々山居士」

便々館琵琶麿

琵琶麿八日幕府の士なりて通称を阿久沢弥市といふ年迄加賀国
茂飛一早く沢鯉鮒の門に迄ひ側の別号ありしも沢鯉鮒
歿後師の号便々館を継ぎその名世に聞ゆ天保十五年七月

十三日歿享年詳ならず沢草八彩寺町大徳寺に葬る法号を「便
壽院湖山日栄居士」といふ辞世の歌に
庭の草袖ふれとも常なるぬ雪の花をいとひそ見ん

二世平秩東作

二世平秩東作八姓鈴木氏にして名光村城北高島山の麓に住し
紀州明神の神官なり人となり多能にして碁を好み又糸竹の
道にくらからず後素の業を拙なくして鈴中狂歌を好みて茅茅亭
の門に迄ひ和号を紀の貞屋人といひ別号を平泉屋と稱せり後
に二代の東作と号せり文政八年八月廿日享年六十八歳にて歿せ今
墓所を詳せず北豊嶋郡上豊嶋村西福寺境内に歌の碑ありのみ

いかもとり霊の衣おはきて不二の山をも神ふいれん

唐来三和

唐来三和い姓加藤氏なりしを別号を伊豆庵といひて元来武家より生れを人となりし性放逸まて家を捨流浪せしが遂通油屋の葛屋二郎右衛義為となり本所松井町の妙家和泉屋さの婿して源蔵と稱せしゝ生涯らくをもとゝ落魄しゝ時

縄の帯弁まいつゝ杖の赤ゝてら稱ら敬よ口ゝあまぐぐ

と詠しといふまゝ曾て留山翁の門よりて師弟の縁をむすびしゝと

き

師の縁をむすんで口をらくらかよこゝろん文ゝの秋を数ゝい

文化七年四月廿五日歿年享年詳ならん深川淨心寺に葬る法号「実好

院要秀」といふ辞世の歌と

かりの世の地水火風をとゝすなうこれて五ゐんのすゝうとなる

東海堂　孔　亜

孔亜ハ姓安藤氏にして江戸の人なり幼名を徳左郎といひ後ち十右衛門と称へ
又徳兵衛ともいへり旧幕府八代洲河岸定火消屋敷同心にして器量の秀れたり
画を狩野十五代の時初代豊國の門に入て画ふ学ぶて果さん歌川
豊廣の弟子となり斯道に励み遂に宗色画を工風して方に世ふたてて
もてはやされ立斎廣重の名都鄙ふ聞ゆ中橋狩野新道に住し晩年に
なり剃髪して狂歌を詠み天明老人と無二の友なりしかとせ天明老人と共に
よかりて神吟せし時家に止めて共に狂歌を詠て楽しみたりといふ安政五

年九月廿日歿ス享年六十二歳浅草松山町東岳寺に葬る法号「顕功院
徳翁立斎信士」といふ辞世の歌ふ

東路ふ笠をのこして極の空西のこゝろの名所をそゝん

東海園船唄

船唄ハ姓坂上氏にして通称を甚兵衛といふ日本橋本船町に住し
宝市亭の門に遊び初号を宝珠亭船唄といひ後に東海園と
改め宝連の判者に列ス明治三年四月廿四日享年六十六歳にて歿ス
辞世の歌に

おいとまをまうしてさらば極楽へ行くと称ゝ弥ゝ陀ゝ

浅草山谷吉祥町念仏院に葬る法号「西誉東海唄念信」

二世 東海園鶴翔

鶴翔ハ初代東海園の男にて通稱を文の名を継て坂上基[illegible]と
いひ蠣殻町二丁目に住ス 若冠の時より文に狂歌を学ひ初号を
東壽亭鄙唄といひ狂歌ハ文に拙くて忠盛の名ひろ四治廿八年
の春還暦の賀をなすに文の号を継て東海園鶴翔とひるがへ
ひんかしの海辺に園の名を継てくる年寛を鶴ふ契ふん
と詠しに文化の歌ひを依りて同じ年の九月廿八日に享年六十一歳にて
歿て浅草山谷長佛院に葬る法号「顧誉逸深宝道伝士」

桃江園 雛亀

雛亀ハ姓細木氏にて通稱を源蔵郎といふ江戸山城河岸
に住す（香以のおとゝ）性花奏風流を好ミ和漢の書を
繙き書ハ日生池に学ひ師と伯仲の世評あり又俳諧を嗜ミ俳
名を仙塢と号し狂歌ハ初代弥生庵雛丸の門に学ひ桃江園雛
亀といひ後に源俺（ミナモトサヤヒト）といひ一号を鶴の門まゝ家の印を一△と
いひくり一鶴堂と号せり後年弥生庵の別号桃の木を各の
りて桃の木鶴庵と呼へり晩年花街柳巷の家に秀詠多くあ
り称せ江戸名所と歌して小舟を繋り平生遊和ともあつる
幇間なりとい遊藝人を各所古跡に見て魚屋小溪に命して画らせ
持に上せて友人に於りしといふ安政三年九月廿日歿て享年詳ならず
駒込追分願行寺に葬る法号「自誓雲外艇池居士」

初代千種庵　霜解

霜解ハ姓山中氏ニて名恒海通称を要助といふ常陸の産ニ若冠の
比江戸ニ来り淺草馬場住し和漢の書を販きて業とし性狂歌を好ミ
初名を梅霜解とゝ号し別号を千種庵といつり老後淺草新堀町ニ
移りて狂歌をやしなふ〜とあり〜天名四方ニ聞えつゝ文化八年四月廿六日享年
九十一歳にて淺草今戸稱福寺ニ葬る法号「釋辭利信士」

二世千種庵　諸持

諸持ハ姓勝田氏ニして名諸持通称を雄輔といふ松蘿又芙蓉花
等の号あり淺草誓願寺前ニ住し土地の居宅を勤む國学及狂歌
を能くして初号を志雲亭といひ後ニ二世千種庵の号を継き名

奪世子世之てう又一中哀を書く於一呆二南の名のり頗る妙なるあり
しらあまく　都社中と不和を生ゝれ都一呆齋の名を廢　自ら
一流の語哀を立て宇治左史柴文と稱し以後都の泥より係る物を語ら
し自他の狂物をのみ語りくるをもて文藝より逢せ　泥の如く大よ
世よもてはやされ遂に一家をなして今よりてまて宇治節の鼻祖と
稱せらるゝまゝ名譽とふ尽　安政五年二月廿三日歿す享年六十
八歳法華寺馬道元中谷物音院に葬る「心靜院田山道榮居士」

三世千種庵盤樹

盤樹ハ姓梅澤氏にして通稱を左尾林右郎とふ江戸本所元町
大徳院の近傍に住し書物を販きて業とし性文藝を好む故國吉

川町ふ所慈栗園の門にありて狂歌を学ひ初号を貧乏盤樹と
別号を猪吟社とゝのり後に三世千種庵の号を継て千名世に公ス
平生安國廣中路の市にあて書物を販きあるゝ狂歌を称し家に伝れ
ハ数多の書籍に眼をさらしまゝゝ家貧なれいかをやりて世渡
りすれとも其性剛直にして山伴の岩藤の如き富家の人と風交
すれとも曾て諂云を是せゝるゝ常に清貧を楽しみゝといふ
安政七年閏三月九日享年五十歳にて歿し浅草山谷廣徳寺に葬る
法号「淫覽信士」

智恵因なよ

智恵因なハ元麻布の妻にして其姓氏を詳にせ尺俗名をもふるといふ

古く狂歌を詠て當時江戸の三因子（智恵因子、世話因子、ひま因子、
をいふ）とあゞめられ、其人なて世の人のこゝろ知る所を曽て空細工姫く
ときき

君ふりて誰ゆう尼せん船のきけのむく〳〵とまく〳〵和哉

と詠し、とふ老年よりう髪をあたゝてゝあるゆよ

ふりうハ注げの小梯をお控て木のもゝ人よいもれん

文化四年六月廿日歿に享年卒三歳深川万年町山覺寺葬る法号
「芳妻院園蓋妙栄大師」といふ辞世のゆく

卒ぬゆう尼まゝ奴蓋のさゝ面ゝと思ふもうつ曉の空

塵外樓清澄

清澄ハ本姓石川氏なて後ゝ中村と改む名清澄一名万年といひ、
芝之通稱を清三郎といひ六樹園の男なて狂歌ハ父ゆ性ゆ塵外
樓と号に也側の判者ゆう性いゝく酒を嗜み常ゆ花街ゆ遊ぶ家ゆ
ぬらを稀なれハ折ゆふれ諫る妻をうるさゝとひく

さゝとふ名のぬれもるゝ夜遊ひを四の五のといふ富の女房

と詠し、とふぬる年我ゆをこのを彼の浮嗜ふる縁（緑）樹園元五ゆ義
ひゝふすゝく

我ゆ文ゆ四屋のゆ〳〵名をぬれいゝられを夜食のかゝまりゆを

と詠て勝り、とふ天保十五年四月十五日享年甲九歳なて歿を四谷愛住
町永昌寺ゆ葬る法号「塵外樓清澄哲大澄居士」といふ

地形堂 堅丸

堅丸ハ橋姓より山崎氏也名ハ孝方通稱を又次郎といふ旧幕府の士にて栗園と号し画を能くし狂歌を好て亭哀橋ぬ翁の門に入り狂号を地形堅丸といひ碑仏側の俗者より老後浪華に遊ひ文政六年二月十九日微疾あり翌年四月三日彼の地に歿し同府出務寺町浦長ちに墓所法号「孝院殿文學了哲居士」また送骨をもちて山口水道端日輪寺に墓所法号「高專院得應雲外居士」といふ

長者園 義雄

義雄ハ姓石井氏にして通稱を左助といふ旧幕府の士にして狂号を好む者園と号ハ曾山翁と深く交り其筆意を学ひて骨法を得り曾て四谷に住せしハ近隣と火を失ひ忽ち隣家に及ぶ義雄ハ家を捨てうつれ恐族等を立退せ所置されと道具ハ取片附居りしにより火ハ家に移りて遂に焼失せし職人あと口こと曷ぞ急し是那さあらひません早く逃けなさいとふを聞く義雄ハいふ人を那さん

是那さあらひませんといふ者ハ人つれて居ハのおさりくるなり

と深く那さ立退といふ弘化の末つゝ紀伊國水家部代官元

帰として彼地へお役し在陣中にやうさの門出を取立てといふ嘉永七年七年冬ハ海り根岸氏行の松の陰にて月を友とし世を過せしに安政二年十月二日の夜の大地震のつめに家を要くゆ潰されし

しら幸の家族一同を事とし迎のひて一人を怪家せ〜とのゝ〜ゝそ
さすらひ歩納まる手〜てたまたま方歳らくゝ余をそのふ
と称していまひとつとふを長湯場切通〜（俗よ猿飴横町とふ）の板
り住み根岸の旧宅よれを三て学志よ志の狂歌を記〜うとふ
ぶり〜と根岸の里をさすら飴のぶつ切通〜うへの横町
明治六年九月廿日亨の年卒歳ゝて弱八四谷南寺町法恩寺よ養
る法号「長者園義雄居士」といふ

子代は〜〜女

子代は〜女いろ男の八戸南部〜の藩士加鳴七五郎の妻ろ早〜ろう
秋長堂酒井抱一を師とし俳諧歌を学び秋踊庵とい〜ろ文政七年七月

十九日ゝ病て弱ゝ亨の年洋ゝ麻布今井町善性寺よ葬ゝ法号「源浄院
鏡誉知月妙円大師」とふ

智恵猿人

智恵猿人ハ号を日歳庵とい幸所桂連の劉考ゝう姓永東戌よて通
称を新左衛門とふ日本橋行方よ住〜繪草と積荷問屋を業とせ〜ゝ
幸所番場よ移ゝ住〜法度（両金ゝ用達）をして世をゆさゝ送〜ふ維
新の変乱ゝて幕て諸侯ゝ（用達）金〜金よ恵く拝出と形ゝ〜れハ
浅草寺地中梅園院のほとよ世をのゝれて狂歌を称て身の味〜ゝ
者振日歳庵の号を奴鰻の三人（浅草田原町）へ譲りて極の本猿人と
改名其振馬町（道ゝ）七丁目よ移ゝ明治十年卯月十五日弱ゝ亨の年六十六歳辞

世の辭

うれしさを世をきるはしのほんはで浮世まるりはてたるゆふ

浅草北島町門跡法地蓮光寺ニ葬る法号「常楽院釋円海居士」

張月舍真弓

張月舍真弓ハ姓関口氏ニて名ハ勝馬といひ士理騎の士族
ニて江戸ニ住し狂歌ハ赤坂ふる相良屋の織月連ニ列り
月号免許の別者ニて明治十六年十二月廿日歿す享年七十
二歳辭世の歌

我らの身動くかくりとまれて定風吹水地ニそ吹しほ

青山共葬墓地ニ葬る法号「覺心院真心英勝居士」とふ

四世千種庵春吉

四世千種庵春吉ハ姓佐野氏ニて通稱駿河屋粂七とふ品川宿ハ
新宿ニ住し畳屋を業とし幼年の頃より其職業をよく早く家稽中
通の質屋（俗ニおもん屋屋とふ）ニなせしニ至りの出流ふるまみて
強ニ狂歌を好ミ小梶連の俗者鶏告亭庵宮ふ近隣ニ住居せしより其
門下ニ移り狂名を稲垣秋吉別号を鶏田舍といひ万延元年両国万八楼
ニ於て開歌会を催しこと小梶例の別者ニ列りしより後ニ回連の狂歌の理事
ふるきことハ両国吉川町ふる燕栗園千壽ニ於く教をとひ居りしニ
実兄の世を早くせしより心形ハ住を実家ニ帰りて今の業を営ミ居りし後
燕栗社中ニ入りし千種庵の号を継続して四世と称ハ又秋吉を

春吉と改め品川八雲連の株梁〻〻秀吟頗る多し老後俳諧を
安とい〻娯をむ〻て家督を四つ〻隠居せ〻〻〻
身をかゝ見ゝ〻ゝ俳をたゝ〻ん渡身代をおもすゝ〻ひて
明治三年二年六月九日歿す享年六十二歳南品川移行寺に葬る
法号「志誓良道信士」

丁子園雅好

丁子園雅好ハ姓伊東氏にして通称昇吉といふ天保十年山石川
白山下の家に生れ法衣ひさきて業とし性質落ちて青年の比
より狂歌を好み七福園萩雄の門に入り初号を七福堂武昇といふ
本郷壽連の仲者たり一年ばかり前の庵に利吉夫を安置せ仏寺の

和尚に法衣の價を貸ひ〻ゝに生活難窘催促にゆけとも支
拂もさうさうれハ
ひつもまさに当守ていこのり支吾ひそ〻〻して拂ひとゞまる
と懐ろ紙に書〻〻おせ〻〻に和尚をさすうに拂ひりん法衣の價
のとり形く拂ひしとい〻ふ後年日本橋西の屋に移り住ま水面連
狂歌会の主幹となり又真雅会の幾部人に加はり老後を安く
斯道に遊ひ明治三年四月一日兜町稲葉氏(娘の智子)の宅
に歿し享年六十一歳浅草玉姫町通八寺に葬る法号「釋常雅信士」

長樂園山左

長樂園山左八本郷長者園社中古老判者にして別号を頂山人と

いふ武州多摩郡小河江村荒井新右衛門の男にて壽年のころ
旧幕臣古賀侗庵の者内山某の養子となり後年関東取締役を勤
免たり又根岸本郷等に住し勤勞のいとま狂歌を嗜みて師翁
長者園の号を得て口調よく天明風をよくおせり故に時橋上帰
鳴といふ號を

秋かぜにきりとおいでぶさん谷橋をくくるぶかりは別れ路

と詠ずるに人々感賞されしといふ生涯西向き坐詠歌をなれと云ふ
大正〜明治三十二年十月十八日歿す（日本橋区濱町二丁目の家より）享年
八十歳青山共同墓地に葬る法号「長者園山左居士」

柳亭種彦

初代種彦は姓高屋氏にして名知久通稱を彦四郎といひ旧幕臣
にて幼少の時は神経質にやせ衰へ腹立ぽりされば笑ひ顔をも
れひて花の咲き匂ひを嗅ぎ教訓せしといふ

風にちるまゝにわれて眠る花の影

この句は感じて生涯は身を慎み温和の性質なりしといふ受業師
諸岳楼等の号あり老後よりは芝蘭翁と称し早く狂歌を
詠て花の風成といひ又心の種俊とをいひ俳名を木卯といひ
ゆくゆくは人識りて花は赤扁に乗りて卯は白いとて「あのう
名のつくりと知らぬ熊者らふと嘲りしに種彦云ふこれわと学て

柳を赤扁と卯と書くを俗字なるべし古くより例〳〵なり俳の巧
町公通々の雅俗辞典集より乙卯の年改
ゝる年や柳のもとゞの扁つくり
とかれいとて赤卯の俳名を改め永く用ひしかまた平素茄子形
の硯を用ひその蓋に自祢の姿を彫りしゆ
名人よあれ〳〵茄子と思へとも赤くなるかたち
まゝ常に用ひ三四度の年は壮年の比芝居をぬし殊に坂東秀佳
の藝風を能くまね祢ひて志ふ人に常愛寵云和作事あるまゝ秀佳
の俳ありてまの何ゝ其人を尽さゝるべき故に宗匠連中にて三四度
と呼ひ〳〵を遂に戯作に用ひしとかふ天保十三年七月十九日

弦月宮年六十第赤坂一ツ木浄土寺に葬る法号芳寛院勇誉禅
屋」とかふ

柳下亭種員

種員八姓坂倉氏にして幼名を金次郎といひ又万太郎ともいひ坂
通松坂屋新七といひ始め海を服して業とせり後に芳和の書肆
に対業せり能坤坊良高の弟子と称し一時講談の
席にも出で後に柳亭種彦の門にのりて種員と改む安政五年八月
廿日宮年五十二歳にて深川天嚴寺塔中安楽寺に葬る

唐衣橘洲

姓は小嶋氏にして名茶捷字温元後に謙之と改め太郎通称を源之助と云ふ寛保三年十月四日をもて産る醉仙庵又無得館と号せり唐衣橘洲は狂歌の号にして田安家の小十人にして四谷忍原横町に住し後に小石川の笛吹町に移り住居早くより因山横井先生の門にのりて和漢の学を修め器を詩歌に長せり江戸に狂歌の命の新しく橘洲の門に入るもの庵中に催せしと云ふ時に当時は四方赤良平秩東作大根太木大屋裏住生垣五六人の外命名して狂歌をよむ者あり時去る時に和歌の名所にして扨橘洲戯れに狂歌を詠じて席上の人々に示し人々これを興じて頻りに称賞し流行せり

世よ以てをを形わり彼の式亭三馬の社会觴よりたのめくかり則
三陀羅法師の識さて所し
式亭和欲作此觴や將令醉竹先生鮮首於是請予
以見先生予諾以示之期及期有先生之訃驚駭止矣
惜哉命也先生之於俳歌實中興之祖也云々
されハ橘洲をもて社会中興の祖と称せをもひらことをふハかりさる也
嘉永年よりてをを栗本社歌所といひ新道名流の門下挙て
数へきれなる所社歌の席まて口論せしハのかりそれハ橘洲中よ
りて双方を形つめ和解せしめしうへ歌まとをて
風流ハ和をもとこれ雅席の為君胡越をあらをれ

真風のやをを〳〵中よ雅波をつのくむをのハかりと定めん
と迎先〳〵とふまを老後述懐の歌よ
青雲の志ハ花鳥ようをれ白雲の情ハ風月よりあれ
てはをいらみをられをハ吾身只弾御よ成をを殺ふかし
壺中の天地を睥睨ゑ見てつい白髪の年をハ形ゑ奴
いをつをよ只の酒文とありひさをこ身の紙ををハ酒のいれをの
享和二年七月十八日歿ハ享年一年歳赤坂一光浄出寺よ葬ハ
法号「心眼院浣月誉得閑居士」といふ
加保茶元成
元成ハ姓村田氏みを新吉原京町よ住二代目大文字屋市兵衛

と称せ〜妓楼の主人〜性風流を好み古銭古瓦を愛〜又松茸
を斑入を作らせ小形を得て世に是を文楼斑と賞美せりといふ
俳名を如昇といひ殊に狂歌を嗜て上館集といふを著はせる
時友人山口心牛の号を庵をとひしに心牛うを釣の神元栄を乞てい
くかえられい元成とりかへ〜
加茂川のうづしおからぬ我ゐれいちんうろまるせすつまし
と詠て無しかたに心牛をあるおいぶ〜
ちん客を迎へまうりを彼もすると恋びつく祝は思ふこころこび
と迎歌せ〜とふ文政十年六月十二の殺す高の年祥ふ〜に浅草永
住町称名地中本行寺に葬る法号「釋德保元成禪門」とふ

加保呂浦成

浦成ハ武蔵国玉屋弥八の男にて初名を金次郎といひ天保年中三亭
春馬と号して戯作を著〜世に行もるゝ京町大文字屋の養子となり
五代目大文字屋市兵衛と称せ狂歌を好み浅草庵春村の門に入の
文字楼元成といひ加保呂浦成と称ふるゆえ故有りて大文字屋離
縁の後まさ戯作をこころざし曲亭十返舎一九の門に入り比九返舎一八
と号〜ちかみより遂に十返舎一九の号を襲ひ又四世八文字舎自
笑と称せ老後山谷堀に八文字屋とふ船宿の業をいとなみ
嘉永四年十二月十八日馬道なる富士屋とふ料理店にゆうりをとて
其家に病て歿せ享年不詳浅草今戸橋際慶養寺地中湖江

院より葬る法号「大雨玄機信士」といふ

壁仲塗

仲塗姓ハ清水氏ふして通称を忠右衛門といひ（立清園方慈の父あり）外神田明神下同朋町より住し油石炭（シックイ）を販きて業とせし故よ壁仲塗の号なり（天明の比加信仲塗と号せしハ別人こと）早く牡丹を詠て置山人の門より遊びて名聞をこゝろ次の和年置山人仲塗を（四月年孔より東くれしよりわ〳〵主君の外さしる者をあけれバとて鰈の黄肴の黄こがらをあして酒をすゝめたる置山人箸をとりて黄こがらをほどさんとせしよ板箸はとりぶつとわりうれハ置山人あるを笑ひてとりて

板ぶしはあれとおまへの中あれハめてたれ心のにうこにとり
とお臭いしを聴こかふふしとふ天保三年十二月廿五日享年六十四葬
ゑそ殺に下谷南稲荷町唯念寺に葬る法号「葉願院釋直至
道西信士」といふ

香以散人

香以ハ姓細木氏よしを名ハ鱗香以と号に初め鯉角ともハ本名
蠖とゝ梅阿弥と称に治年間の年居山老人より梅の字の号をそゝ
受け其ハ角堂は晋の一字を存し又香以の字を交以孝以ハと
書しこう梅屋敷庵等を牡丹の自称別者と定め何の屋とふ
牡丹の号ハ文政五年江戸山城河岸の家に居る初名を子之助とふ

後よみの名を継て蓮次郎と称ふ武家号を摂津国屋といふ
より世人皆を津蓮と呼へり曾て若冠の頃より文を敬愛の風を尺習
最初のちまさよりのち出て赤民と称く交りたれハ俳諧を花街柳巷
の作よ最も秀逸多し安政年間より家業を弟に文久三年六月の
定川辺よ退隠し七後落髪在三年又江戸よ移り遂よ明治三年九月
十日歿八享年四十九葬駒込追分弥勒寺よ葬る法号「梅叢香
次居士」とつふ

俳名垣魯文

魯文八姓野崎氏より幼名を鼎吉と呼ふ後庫也又文花と称ふ
〻天保後俳名垣魯文をもて通称とし文政三年酉六月三番稲荷町
の家よ産る若冠の頃より文事を好ミ天保八年の春新橋弁川町ろ移り
屋号を吉方へ丁稚奉公よ在迚ミ宗眼ふ行れハ読書をもとし山崎河岸の
香炉よ引籠られ二世千種庵の弟子と称して俳歌を学び回章花笠
魯女の門よ入り和堂孫海と戯号し弘化元年英魯文と改称戯
作よ筆を採りしも嘉永元年戯号の投稿を催し自ら評歌よ
赤本の極あくあくよ我ハ甲斐せんつくと名を流さふん
安政の比より其名世よ高られて著書頗る多し維新の後よ新政の筆
をとりて三名海内よ唱る明治廿三年名刺命といふを催して文檀を
退き遂よ同廿七年十月八日享年六十六歳を終て谷中三崎町永久寺よ
葬る法号「仏習庵猶魯草文」とつふ

門田稲葉

門田稲葉八別号を年々富といひ姓ハ寺井氏にして通称を左兵衛と
いひ江戸浅草鴻白銀町に住し幕具販きて業とし早く父事よ
りて高蘭亮庵の門に和歌を学びて稲秀と号し見田と号
せり後年六樹園に近藤湛町へ居を移して住し老に及れて
その文学の凡あらまを知り遂に先師亮庵の許を辞して六樹
園の門に和歌を学びて後に門田稲葉と改め
なむ文政十三年九月廿八日歿江戸高輪芝切通し光円寺に葬
る法号「称勝善信士」といふ弟男桂亭昭秋(通称左兵衛といひ
四條風の画を能くし画名を寺中鴻渕といひ)父の後に追福の狂歌

命を催し秋を常といふ題にて詠める

ふるさとのまがきのうへにつきそひし秋ぞとうれて鳴るこがめい

加茂季鷹

季の鷹ハ京都上加茂の祠官にして姓山本氏にして正四位下出雲守に任
せらる別号雲錦亭といふ始め有栖川職仁親王の侍臣にして和歌を学び後に加藤千蔭と交り学まれ進て名聲
海内に聞ゆ三文の書にて生名を知らざる者なし俳歌の揮毫
を乞ふ者門に市を成せり狂歌を能くして其門に入る者上ハ貴人公卿
より下俗に優れるまでその数千人茄子の画に賛をなし歌集を雲錦集といふ或る

あるひ　ひきつ〜　いかりれと　ものすれとも　ふすひと　加茂の季の雁鳥
と　迎免〜　とふ　千代秀　源峯　天保十三年　九月十八日　没
享年　年一歳

神田菴　厚丸

厚丸　八蒲姓　武蒲氏　名忠司　字厚丸　通稱　伊勢屋　喜兵
衛　神田猫可　後　紙屋　業　若年の時　流　好　三十
歳　諸國遊歷　家　三十年餘　四方　行き　とふ　狂歌　元堂
綱　教　學　白乐側の別号　笹迺屋　蒲樹園
六史園等の別号　五十歳の時　武州豊島郡　庵　ふすひ庵
と　呼　國字　詩作　家　永　國字　待仙堂　称　九十九歳

病　患　日　里　庵　後　享　ものぼり　銀田
隱居　又　狂歌　遊ぶ　年　餘年　ふとふ　政十二年
十月十日　没　名人忘辰録　十九日　享年　あり

月花　とうれ出　夜　きも　雪の　ひ
浅草　西福寺　蒲　法号　浮雲厚丸　壽仙居士

四谷庵月良

四谷庵月良ハ姓津江氏ヨリテ名ハ正政通稱ヲ林蔵トシ旧幕臣ニテ四谷弘町ヨリ住居、山の手屋敷の狂歌到者ニテ有名ニテ跡ヲ絶ツ林ふ住居ヲ因福寺ニ埋ム也隅田ヲ風月ヲ愛シ古第家俗謡栄仲氏ヲ友トシテ〻〻老板潤意の狂歌ヲ石ニ彫リテ角丸吉十二社ニ建ンヲ企栄仲氏周旋シテ一日十二社ニ狂歌の友ヲ集メ雅筵ヲ開ク小孫前雪亜西伯席上ニ筆ヲ揮テ画賛の扇面引ヲ乞ヒ頃る盛会ヲ形ヲ〻ヒ明治三年六月廿四日歿ス享年八十二第東大久保法善寺ニ葬ル法号「相如院是要日良居士」

廿日　芦　仲任

蓮芦仲任八姓田沼氏にして名右兵衛といふ後出家門と
改江戸青山久保町に住し世に質物と業とし又さすが流に能く狂歌を
まなびぬ蓮芦仲任と号し弘化四年十月二日歿し享年六十四青山
原宿海蔵寺に葬る法号「金恵院瑞巌玄祥居士」

四方山涙女

涙女八蓮芦仲任の妻にして稲氏の女にして俗名をたりといふ狂歌を嗜み
其業文よりおくれし妹長堂物菓を友とせり四方山涙女八狂歌の
号にして慶應元年十月廿六日歿し享年七十七年前に同じく海蔵寺
に葬る法号「貞松院西操真栄大姉」

瀧の本千丈

瀧のもとの丈八姓江里川氏にして名忠弦通稱を助右衛門といふ後に勘解
由と改む庫帝芸坂に住し旧幕府の士にして橋本流の能書にして第一道を業とし其頃の門に迎ひ後年京都二條家
より宗匠の号を授けられ台賜堂と稱し瀧本の月次会には狂
歌堂島人（相良老公）をも出席しるひ集会の雅興少からざりしと
盛会を極めしかるに能筆の故をもて勘定所書役に召出され
勤務のいとまに能き為自然月次会を怠りて遂に八休会せしといふ
天保十年十八月十五歿し享年詳ならず麻布二本榎町深廣寺に
葬る法号「礼譲院仁誉儀山忠弦居士」とふ

た

俵屋宗達

俵屋宗達ハ別号を養源庵といひ姓ハ源氏にして通稱を勘兵衛と
いふ本所れ生れ法橋に位し京都にて、江戸店、赤毒山人、宋雪斎、
銀華亭、等の數号あり和歌ハ烏丸光広卿の門に入り絵画の門に
入り養園真島（後に神田右衛門といふ）の社中に遊び後に卯敬園の門に
のり養園側の別名にして又江戸出身連といふ者劇の連中と形り
て文政の比最も盛んなりしといふ嘉永元年六月十五日歿八十年
享年八十餘辞世の歌

みの為に苦労なるあや紙のつめ苦労なるかなそ別て

本所紫平町大法寺に葬る法号「真浄院持法日通信士」

俵の船積

船積ハ別号と大渓舎といふ姓大竹氏にして通稱を高源屋三左衛門
といひ江戸小綱町（細り）に住し船積の問屋を業とし故に社名を世りまて俗白
を嘗俗名を法六庵宗弘と呼へり「こたつ俵」といふ社歌の著書あり
文政三年十月歿し浅草山谷大通誓西寺に葬る辞世の歌に
まめて居る間を報ひるはうろくの口水を絶よ人ととの土られ

清の屋清麿

清麿ハ姓世系氏にして通稱を清兵衛といふ神田小柳町に住し町代
をつとめ和歌を好みて天明老人に教て小梶側に遊ひ狂歌に人の
さそ名をうり梅の屋の門下と形り清の屋と号し神田連にのりく

幸町例の判者となりて明治維新の後神田區役所より出勤しかさまら
狂歌を楽しみ性頗る戯作を好み数多く遺されい彼の十返
舎一九の膝栗毛の如きハ勢客記しるといふ明治三十年九月廿三日
格南龍居町の邸にて歿す享年七十四墓下谷法泉寺に葬る法号
「松翁清秀居士」

橘八衢

橘八衢ハ千蔭の狂名之姓加藤氏なりて字徳世麿通稱を又左衛門
といふ世方宣園と号す又耳梨山人遊樂富江翁といへり能国法師の裔
なりて和歌を加茂志淵に学ひ近世斯道の名人と稱せり狂名又の職を
継き幕府の要力を勤む天明年中仕を辞してさらに古文の学を

ここせりまさ狂歌を詠て虫干あるべしとの事
酒のみいつてを踊を忘さぐるかるるといふて吸らん
といふ歌ハ最も知る人多し晩年病苦持と婚姻の歌あり或ハ又枝
直り墓をよまう仏寺僧よ告て曰余を明年ならハ黄泉の客と形る
べしとあれさるを其ハ今の因石塔の因高すぎ〳〵として学視を乞ひて橘の蔭
墓と行狂歌を沮面て立ぬ〳〵果て天保年文化五年九月二日歿せ
り享年七十四墓本所回向院に葬る寺法ハ奇矣の思ひを抱て其
遺書を墓石へ切附しといふ

高橋梅明

梅明ハ姓田中氏なりて通稱を小鳴屋二郎兵衛といふ寛政五年江戸馬

喰町の家に生る岩年のころ風流を好み廿餘歳にて弘誓園梅磨の門に
入りて狂歌を学ぶ(初名を)其友亭門住と号ひ後年長谷川町に住し世人のいとな
斯道を究め遂に一派を形成し梅園と号し梅垣側の舞首なり
抱星子、雪の星子、梅原山人、和漢陳人、竜の門、等の別号あり其
師に出る所の歌は幽玄軒を好みて自ら天保調と唱へ一流を新せり狂
歌の著書頗る多し　安政六年十月廿九日享年六十七歳深川新
藏前町西光寺に葬る法号「光誉梅園梅明信士」

大盤若腹満

大盤若腹満は姓荒船氏にして名東秀宮は恒山通稱を吉三郎と
江戸芝宇場町(芝甚右衛門住居せし跡)に住し数年学ぶの師匠なり享年
頗る多くして大書に物と浩て其名聞えたり狂歌は六樹園の門に遊
び悟智窟と号せり天保三年八月十七日歿す享年五十七歳深川
本誓寺塔中正應院に葬る法号「東秀酉叟法子」

澤山人

澤山人は本姓石川氏にして武州苅羽郡粟順(須り)村の産なり通稱を
喜平次といへり早くより江戸に出て本銀町に住せし某家の養子と
なり狂歌を好みて四山人の子弟を学ひて千四を極む老後故あり
て故郷粟須村なる宮内に帰り慶應三年十月十六日歿す享年
年二十七歳浮世の夢とく

とみ石に世をふる苔の命毛をきのふふりの雪れあるらん

石川家所持地の図く無法号「澤山院鏡徳日冠居士」

園梅麿

園梅麿ハ別号を始め春江亭といひ後ち師範園と改む姓ハ源氏江戸本所緑町に住し通称を島屋義右衛門とふ陶器を販きて業とし又狂歌を嗜みて花園例の魁首なり梅園花咲庵雲井園等と名乗て俳諧を門下なり出て其名四方に聞ゆ天保十年十二月十日歿し享年七十七歳本所二四目部勒寺塔中教光院に葬る法号「結盛院芳薫梅賞居士」歿後弘化三年梅麿の男総穂父り狂歌を右に鐫りて亀戸東宰府境内へ碑を立て彫こ麿りる歌に

あちらなれハ云ふり〳〵よりき出てあるー清水いの手せさうり

つふり光

光ハ姓岩氏ニシテ名誠之通稱を宇右衛門といふ（諸書ニ如此ニ門とかゝ非ス）又ハ豊昌居ニ住シ士ふりしの故ニ浪人シテ江戸兎井町ニ寓居す光ハ兎井町の西ニ居る成年ニしてより日府の町代をつとむ性酒癖ハてしてく酒を好みしの雅学ニモ心ヲ寄セ故當時流行せし狂歌を詠て斯道の名流とひろく云ふり壯年の比より酒のゝ元ニ頭赤く元て光りてる故戯れてつふり光と狂名をまゝ別号を柴揚庵といふ後ハ町代の俗務をいとひ他人ニ其役を譲り置き人ニ遊ひて巴人亭の号を授けしが四方側の判者と成り當時牛門の狂歌四天王と稱せらる（唐衣橘洲の著花集ニ曰（前畧）赤良素丸ニ言名の俊傑ニて其徒

を左よりひらき茨江川よりあがり堂綱南よりそゝぐ所をまつゆりふく
西よりて昔より歌の旗上せ〳〵ちりまゝ額 飯盛 金持光のまをから
ついでおろり長を歌の四天王と称せ〳〵ちゝ（ちゝ）とかりいて酒とまを
祝中よりの名の門前ひろ年卯月の初旬ひ事まてひろ家より招りれ
大酔して家より帰り前坂をたゞ上俗まをたゞ上俗まをたゞ上俗
奴の三四つ起きてうてしてさうたらるを奴屋を泊らんと添より柱へ行を
おつけるおろ空そくく時の唱くそ
おそきに泊屋より奴屋を泊るあて柱の行のおろときいて
蹴家より俗る集い光の門入てそくく柱おを添〳〵の先の柱ろの行ろ
寄ちと耳よりて柱をひ柱をたり〳〵と行あきて

うふ柱のあと那り四方より誘れて堅よも耳の中をきひきく
と添〳〵といふ又ひろ泊雪ひいて俗りれい左を三さく家より居
越の國より西ちりもる〳〵友人のもに昇りて
常の歌の俗泊去とあ数ちを泊のこる雪の屬をとそひい
と添あて門辺より家をそこりれい光ちりあへひ
常よのう〳〵お宮まるらせん駅去より梅の雪の枠の木
と答へて〳〵家より招きのれ〳〵といふを他せ之四之〳〵歌頭ら家〳〵崇政
八年四月廿九日の夕方ひ喜年七十崇駅迄猪美寺より葬ひ法号「智恵
高徳誉志光居士」

舊の唐 九

つ

葛の屋九八姓九山氏にて寛延三年四月七日産る幼少にて吉多川
某に養れ姓を吉多川と称し通称を葛屋重三郎と呼初め
吉原に住せしに天明の頃通油町に丸屋といふる地本問屋の家を購ひて書
林を開き耕書堂と稱し蔦屋重三郎と世に称ばれ当時名高き文人雲
客に愛顧されて身一期繁昌しかりまくらの四方の社中とありて
狂歌を詠み柯理（カラマル）と戯号し丸屋と書き吉原細見の板を
購ひて板元となりしより序文いろあらに置山人などかく
しるしまくれば朱乗花菅丸と号し菅丸の号
立花ふるいつてもおめしまつぶぬきつの松の板元
細見の書名を立葉の松といつかく誤れること後故なて置山人

この序文を改められしより京伊勢屋を改て年毎に新形にして
名を新ぬ狂歌をみ名を名物をのみとして金を出ろ八南蛮
三尼信板元に送りておのゝ序文を細見に作りせんと戯れみしとふ
世に吉原を題して産を破る者ありまくられと吉原より出て大賈人に
なりしこの屋丸のみなりんと當時皆人いひなしとそ寛政九
年五月六日享年四十八歳にて浅草山谷西法寺に葬る法号
「幽玄院義山日盛信士」といふ

初代筑波庵紫陰

紫陰姓君塚氏にて下谷摩利支天横町に住せし丸屋伊
兵衛といひし質商の性温和の人にて狂歌を詠て身の楽しみとし

倹をやり奢を省き月菴を名とし一生世を安く送り享保三年十
月三日歿し享年不詳谷中初音町長昌寺に葬る法号「徳玄
院菴波庵日新信士」とふ

二世 紋次 波庵 繁樹

繁樹は初代菴波庵の二男にして本姓若塚氏と通称を右三郎と
いひ浅草原の養子となり若年氏を継ぐ浅草大仏裏町に住し
其性活達にして仁侠を人に面白くもてなし若年乃ち狂歌
を嗜み和名を園林雄といひ雅号を号し後に八重の菊
枝と改めしが享保五年四月朔日の号を継ぎ二世菴波庵繁
樹と号し本国河内橋本の郷に帰し二世側の群

首となり後年本国橋町に茅葺店を完業せしが程なくして
閉店し後武州和泉町に移り田舎町の井筒へ通勤して世を送りし狂歌
のみハ一日を休詠せしとふ明治十九年三月吉歿し享年六十
三歳前に同じく谷中長昌寺に葬る法号「世方菴院梅山日香信
士」

半井ト養

ト養ハ牡丹花肖伯の孫泉州堺の人延宝六年十二月廿六日歿年七十二
（家記ニ寛文六年十二月廿五日番医師半井仲材日七年十二月廿三日二百俵下ル日
九年六月十四日初て医員見ル仲材延宝元年十二月廿八日法眼ル仲材日六年
十二月六日称ニ通リ法眼ニ仲材或書ニ元禄四年七月廿六日奥医師半井
ト養不審ニ儀ニて伊豆三宅嶋ヘ流罪ル卒ト仙俗小出大隅守ヘ預
日八月六日ト養下人（吉ニ南出舟日五年五月十日嚴有院殿十三回忌法
事ニ付一回ル免日十年四月廿日ト仙ヘ十人扶持ニ下ル三ニ）「名人忠辰録」
編者曰ト養ハ最も粗歌ニ名高き故その墳墓を捜索セラ
レ人しられと存在ル明あらぬ多まく河内源義とふ半井家

な

る縁故五人を尋て其系譜を見しに「名人忌辰録」に記る所と
お違せり誤を糺して在る記に狩崎墓のそは掃墓餘録に
委しく記すべし
ト養は名を宗松といひ又は云也といひ牧羊翁と号し母は天王寺
屋宗及の女にて崇芸尼とつけり ト養は幼時より和漢の書を授
俗諺を負恨に学ひ多く狩崎自称の家集をト養狩崎
集といふ寛文の初常憲公の命により江戸に来り同六年十二月廿九日
医官となり福二百俵を賜りしとそ
こしらうきりゆの年より多くはまぢト養うちうかゝりより
まつ屋地を拝領し狩崎その時名る歌（江戸砂子）

ト養は布道とこそ思ひしようみちをこそは外科のそみり
とあり（編者曰この歌自称とは思えかねて恐らく他人の作ならん）また或
る時去る所の某師堂のうらに狩崎をつくりしを見て
中古も外科を療治はありやるもの某師の所よてうの業とは
そ他なし 狩崎家の所とを衆集に委しれ家に祖父を授典
薬頭に任せられ素絹白袴を賜りて三百石を領し寛宝元年十二月
法眼に昇進せしとそ
ありかて 古裳束をせんうくのりたまふことをきまりり
と称しとふ延宝六年十二月廿六日江戸に殺し享年七十二年に葬るを
詳ませしいと惜むべし

な

中山鬼卵

鬼卵ハ栗菓と号し又の名を大須賀知日といひ吉野日坂の驛に伝
戦陣の双紙なと著しを其名世に聞えり煙草を吸て業とし香の
強きへ第六に

世の中の人と煙草のうらはかりなりと形りて塩よりそしれ

と詠られし或時白川楽翁公この歌を見あひて甚く賞美
せられ鬼卵を呼しを見のうへ衣服なと給はりしといふ文政の初
香川京樹江戸へ下りし時京より紫雲をとりよせ扇に鬼卵
の毒多まりてふ一七日のうしをとくいとをきをよ思ひとり侍へ

に

ところとも云そのあとの茶菓のつまのうかれいろはかき
思ひやるこの中山の夜形きいしくふうん君こころを
と詠して贈りしとふ安政六年二月廿三日歿に享年八十三歳

何の庵 梅逸

梅逸姓江藤氏にして通称松五郎と云神田連雀町に伝来菓の
問屋にして司と呼へり十七の時父に別れ四代目を襲ひ業を勤こ
其餘暇風流を好み茶は石州流を山尾不休翁に学ひ其子に
活花は松尾宗程翁に教て古流を能く中伝を得て松尾宗程逸といて
俗諧は阿心庵永機翁に和歌は奥山義を受け不忍庵国定と号雪流の判者
にて夢曲は清楽を井出一渓女師に一中節を宇治紫登女師に学ひ程

な

云ハ故矢田谷の門より連の隆流を立ててなを学ぶ故梅
亭金鵝とぬるよりて亭金鱗の号を授り関東空也より葉阿弥の号
有り又頗る好劇家にて三升連を再興せり狂歌ハ本町側の柳の屋
の門下と称り菟道山人の別号を襲ぐ所又山崎河岸の香以と
義ひて其狂号をつぎ何の屋梅迩と称せり明治廿七年九月其
拙宅にて催し中町側より連入せり当時府下高名の粋士といつり
明治廿九年十二月廿九日歿ス享年三十六年谷中初音町観智院に葬
る法号「菜園梅迩居士」

鱈盛 二方

鱈盛方ハ姓遠藤氏なりて通称を山城屋弥市といひ古くより
本都馬喰町弁天日ノ在りて世々旅人宿を業とス盛方性風流よ
りて狂歌六樹園に教をうけ伯楽側の俗考より
後の世を推ておもへ〜ろくろくひく人なる奥のうらよりなこと
この歌ハ狂歌作者録に載くく人のよく知る所なり寛政三年七月四日
歿ス享年詳ならず辞世の歌よ
かりの宿とまこひ〜て今死出の旅路へうつる宿町
谷中三崎日蓮宗大法山一乗寺に葬る法号「園梅院速成日到」

二世益木 立瓶

二世立瓶ハ本姓野〜山氏〜後に篠山正三郎と稱ス（師の姓篠田と本姓野
〜山の一字宛を有せるこ）通稱を篠田金次とい元来日蓮宗旗本野〜山

大膳の二男にて若年のころ初代五瓶と懇意なりしかばときどき隣家の池に蓮の花うゑたし〻況おの〻を訪ねゝふかんとて小者に尋ね
られたよ取〻あられつゝそのはちすにて
思ひもんと思ふ白の月明り掬ひ〻られてい人ゝらゝ蓮
と添く花をせ〻よ此と早くを文の耳に入りて遂に家を追ひおされ
られを
蓮の実のとんとさらさらたふれて庭をやき葉の破れぶれぞ
かく口吟ことて角の岸附茅野に引きやく初代五瓶の家よりうちの次男を
物語りかりうこゞく形りに生後五瓶殺せ〻故その名をつぎて遂に
狂言作者と形り菊葉山人、万壽亭、鳳凰軒等の号有り文政
二年七月七日歿に享年五十二歳深川吳服寺塔中正覺院に葬る
法号「善岳淨功信士」

蘭奢亭薫

薫はこれ初め狂名を橋加保茂といひ始は蘭奢亭又奇南楼と号し江戸の人にて通稱を三河屋弥平次といふ飯田町中坂に住煙草店を開きて業とせり元来牛込揚場の豪家なる三河屋の主翁なりしが狂歌を好み曽山人の門弟となり弟の如く狂名せり煙草百品の狂歌を添てこゝに煙草の産地の優劣をいひなぶいしより文政年間戯作の書を著せ〳〵り世に行れたりしといふ文政七年四月廿六日歿す享年五十七歳葬所を詳にせず

梅の門さい門

梅の門さい門ハ長門國府中の城主毛利甲斐守元義の仇名元義ハ
甲斐守医芳の二男よりて寛政五年八月曽家督を継き御国侯ゝ
所謂外様大名と稱ス文武の両道暗らゝ戈を交ゆ得れとも性酒色ハし
て風流超毎ゝ怠らいと百ゝ時ハ家臣師長語家臣を招きなゝ女
優よ舞せ太夫よ語らせ謡を歌して酒の楽しみ尽れとも藩政
を思ふ事せよせ故よ天保の始従四位下よ進ミ侯の席を辞して一代限り
大廣間外様國主の格よ列ス号て板間侯中ゝ諸侯よ相良志
摩守敬徳九鬼河内守隆度ゝを始め壮歌堂ゝ穀の門ハ甚ゝ人
いとゝ多く俳諧歌ゝ世よ流行せしゝ元義を同席ゝ人ゝと

さよさい顔の門よりの梅の門さいと号し後さい顔さう四方の稱を受
継き四方さい門となづくる元判者てりこの判者拔露の竹束容を
とそふし餘無とて一曲乃唱歌を綴り（一説さ狂歌堂さい顔の代
作こといへり）清元延壽太夫さ曲節を附させて宴席の席上さ語ら
せてより曲名を「梅の春」とふされいらの文句多く判者拔露の縁語を
用ひて四方五めくる扇巴と農語せ〜ハさい顔の社中鈴昌を祝せ〜
て扇巴ハ四ましさい顔の京章こゆ〜〜の意ときのふふと判者
免許を時日今日の影と卑下〜されといふもつきてなりといふ意て
心ぞりを殺る事をいひ付妻といふて雨屋と受雨屋の縁語なり
引を取〜飛京といふて〜〜こ飛京ハ狂歌の流制をふ

すハ雪の梅の門と我ら作名をいひ自ふ殺日ハ赤間ふるとつけて〜ハ領内
の殺日山をいひ〜〜こ赤号ハ号又領内の赤間関て硯の海文字ふ実
ハ赤号ら実の前ふる海京をいふ文字を海を毎てて〜濤函ふる豊前
國企救郡門司をいふる筆竹をこのてりの海ま生ふる筆こ号
めかるてふとハ彼の和布刈明神の神事餘殺の祭典をいひ〜こ
かくのごく皆領内ふる近傍の地名ふるを用ひて自作せ〜を好
事の徒と思ふべ〜天保十年婦男左京亮元運ま家督を讓り
麻布日ケ窪の屋敷に退隱し故て日窪毛利の隱居といふ天
保十年四月十日歿し享年詳ふ〜し世之号瑞泉岳寺義士
法号「顯明寺殿好文河翁大居士」

梅屋鶴壽

鶴壽ハ姓清田氏ゝ通称を亦吾郎とふ始め佐吉と称し沖田佐久右衛門ゝ信〳〵秣を飯きて尾州藩の医用を勤む狂歌ハ若冠の氏より達者ゝて初名を七屋師匠といひ又松枝鶴壽ともいひ〻後ゝ七谷川町ゝ移り竹合い宗春を師〳〵梅の屋とふ狂歌ハ花街戯場のことをゝくうがちて秀吟多し市町側糸巻連の魁首ゝ生名四方ゝ号ふ老境ゝ入り秣翁と稱ハこハ彼の天祢地ゝ思ひらせて始め鶴壽といひ〳〵ゝ對〳〵秣翁とハ洒落ゝて晩年中宗ゝ頼ひ歩行を自由ゝ成ざり〳〵ゝ元治元年四月十二日沖田板京のほとりゝて遂ゝ歿ハ享年六十二歳この時行

家の人〻ゝ知れさうれハ自身嵩屋へかきゆ紀て取祖〻ゝに懐中ゝ一巻ふの短冊ゝ入りてこれゝ治梅屋とふとゝ入りて家族を呼び〻あ〳〵引あ〻せ〳〵といふその歌ゝ

つまぢくゝ晩期ゝこの世のいとまごひ　ゆきゆく駒のおくり狼

駒の大円寺ゝ葬ふ法号「梅屋鶴壽信士」

紫ちゝ女

紫ちゝ女ハ二世画賛額翁（初名鈴鳥屋額祐）の後妻形ゝ俗名浪子とふ翁の薫陶をうけゝ狂歌ゝ〻ゝ連の月並会ハ毎時ゝ忘のゝ柄ゝ入りきゝ〻ゝ写真とふ歌ゝ〻

ゝ月々へ花ゝの写真をがらまて取祝ゝ秘義の箱のむさゝあ

と称しよ人々感吟とゝかくこゝろ　明治三十年三月廿日歿八享年
六十三宗四谷南寺町日蓮宗ゟ墓所法号「紫雲院妙賀日哲
信女」

初代鳥亭焉馬

初代鳥亭焉馬ハ姓中村氏ゟ出て名英祝通稱を和泉屋和助と云
本所松井町ゟ住ハ元来大工の棟梁なりしゆゑ早くゟ狂歌を学ミ栗山人柿園
高とゝひまゝ大工ゟ故ゟ野見さうふぐん墨金と戯号ハ曽て五代目市川団
十郎と兄弟の義を結び一号を淡海楼といつり安永天明寛政の比酒落
本ゟ洒落物ハ浄瑠璃の作を那波中碁左平記白石噺の如き今ゟ引て
まで諸劇場まて流行ることハ人のゝゝ知る所ゝまゝ久しく渡れる落
語を再興して社中ゟまゝ行り場ゟハ戯場ゟ遊ひて狂言の作を補助せり
草双紙を著作せしハ寛政五年ゟ始て著書ハ戯場ゟかゝる物最も多
文政五年六月二日歿八享年八十歳辞世の歌ゝ

思ひきやかゝるこの花を今そ見る○○○○○○○○の安時の道

本府表町最勝寺に葬る法号「三樂院壽徳焉馬居士」

二世烏亭焉馬

二世烏亭焉馬八町堀力山清助在東門の男に通稱を賞次郎といふ深川
古石場に住し武相甲豆駿房総の國々を尽くといふ志して七國橋と号
し狂歌を伯樂舎に学び松壽楼永年といひ坂に二つ樹園の門を建ひ
蓬莱山人と号し文政十年二代焉馬の号を継き戯作に筆を採り又吉田
追風に角力の行司を学び弘化三年三月近松門左衛門と名のりて中村
座浄瑠璃の作者となり文久二年七月廿三日戒前場の家に歿し享年七十一
歳山石門白山居士町大雲寺に葬る法号「松壽院縁誉清月居士」と

いふ殁後三世焉馬と其社中の人々おもひ合して深川冨ヶ岡境内に歌
の碑を建てその歌に

いとつゝゝに迄る月日をつゝゝにつゝゝに老ゆるうの那

海の屋廣志

海の屋廣志通稱を与作といひ本府元町に住し鰻の蒲焼渡世
深川屋の主人に早く狂歌を学ひて梅の屋の門弟と称し明治十五年四月
披露の狂歌会を催して本町側の列者に列し性温厚にして伝をたゝて
人に交はり一女を角力大鳴門灘右衛門に娶りて女婿格孫に待合茶亭
をおさめ当時この家にて連月狂歌の月並会を定義し多り昭和九
年十月還暦の賀に茅川魚税といふ號をおくりて一会を催し自ら祝

し歌と

ゑとせをん鶴のすゝきに踏ゐ〜北も形きをせきゐ〜赤の國

まさゐる時宜昭の商人とゝくる歌まて

たうけさゐゐうゝまを儲んとゝみよゐのう奴金子高人

と詠しかこの歌尚ほ秀詠ゝとゝてまゐせり 明治廿三年十月十六日殁ゝ

享年六十五宗深川亀住町心行寺塔中西壽院に葬る法号「梵九

誉一賞徳賢居士」といふ

大根太木

古木八姓松本氏にて通称を山田屋半左衛門といふ飯田町中坂に住し

辻番詰員といふをして世を送り晶を古く狂歌を誇て塵積梅

と号ひまさ雁奴と人呼べり居頭に

世の中のちり積りて山と成ふ山ゝとりせん塵のこの身を

と自詠の狂歌を誇て猶けゝ雷といふ天明のゝを盛んなせり惜しむ

らくは殁年詳ならゝ弱冠罪寺町弓念寺墓ゝといふ殁時友人

お集りて追福の狂歌会を催せ〜時平秩左仙ゝみし歌に

ときゝ〜といひ田町中をゝまむこゐのら男を孤出の山中

大屋裏住

裏注ハ姓久須美氏ヨリテ通称を白子屋孫左衛門といふ元ハ某侯の藩
中なりしを浪人して本町ヨリ住居せり先ハ勢州の國司小畠家ヨリ仕へ南
伊勢なる某地を賜ひ久須見村といふ十餘世の孫の時ヨリ小畠家
滅ひしかハ白子村ヨリ移る之後の人駿府ヨリ出て賈人と成り始て江戸ヨ
来り万治二年七月十日歿ス号を裏注の祖先と裏注ハ狂歌を好ミ
寛延の比ト柳の門ハ入り大奈権亭泥と号し生涯世餘年廣泳せしか
明和年中元空網ヨリ新て又泳と称めし後四山人ヨリ改ひ大屋裏注と
ひ四方の門下と成り寛政九年十月剃髪して京師ヨリ登り初て京
極英門の医法命ヨリ受ひて
常を姓もなく狂歌仲間ヨリ惜まれ居りしなり

とゝ山狂歌を泳しヨリ或稲神家この歌をいとゝ稱美しかひて萩の屋の
号を賜ふ（号を本町連屋の字側の皇祖とス）文化七年十月吉歿ス
享年七十七寿辞世の歌ヨ

楠のつよきを老の多のすれ人ちての後ハ石と成るもの

深川法禄寺塔中南新院ヨリ墓ハ法号「諦安浦住伝士」

大木戸黒牛

黒牛ハ姓高井氏ヨリて通称を左兵衛といふ越前敦賀の産之幼き時
江戸ヨ来り或ハ人の家ヨ養れ人となりしか宮古路加賀ヨ丈の門弟となり
敦賀ヨ丈といひしか師の富士松薩摩ヨ改名せし時共ヨ富士松敦賀
ヨ丈と稱せしか後年故ありて師弟の縁を断て独り敦賀ヨ丈と呼ひ

しよ翁日乃二字ハ禁止せられて宝暦八年鶴賀と号ス狭椽と称
し大よせよりてまさされ〳〵ろ是今よりてるやて鶴賀狂歌ハ濱辺の黒人の門
本の異祖と云ハ寛延創製して鶴翁といつり狂歌ハ濱辺の黒人の門
松ひせこそ猶よ住居せ〳〵をとて狂名を大木戸黒牛とハ号し有天明
六年三月廿二日歿ス享年七十五家薛世の歌〳〵
生て居るうちハ何ぬと神ほとけ仏ひとひ世話てごそつ〳〵
浅草田甫幸龍寺よ葬ル法号「実相院真月日如信士」

久練堂 橋良

橋良ハ姓内藤氏ハ名重喬字子章久練堂又盧斎と号ス
武州多摩郡小野宮村の人世々医をもて業とス性狂歌を好ミて
早く唐衣橘洲の門よ入り橋の一字を受て橋良と云ひ又横笛をもてなす
年毎に来よりてれハ小金井よ出て江戸を経めぐりて三三の内ニ
せり又本居先生の人と為りを慕ひ生前ハ肖像を常よ座右よかけて記念
よ礼ぬ〳〵彼の安潟のやまと心の歌を思ひれ〳〵ひてそろはぐりと
い心天保十四年三月十二日歿ス享年八十二家

花源洞継穂

花源洞継穂ハ初名梅継穂といひて花源洞ハ別号あり姓海辺氏ハ

して面白き島屋清右衛門といふ俗称園梅麿の男にして本所緑町に住し
陶器を作りて業とし梅園、花咲麿、雲井園などと時を同じうして
花園側の別号なり又梅麿殺されたる天満宮境内に父の狂歌
を彫りて碑をしたふに建て明治五年八月三日殺されたる享年六十八歳
本所林町弥勒寺境内弘光院に葬る法号「光源院宣誉廣覺
継穂居士」といふ

八幡山伝海

伝海は雄徳山豊花坊の社僧にして名は雄貴花洞玉雪子等
の別号なり又は春仍といひ日山滋本坊昭乗の法嗣にして梅弟事を
好みて始め小堀政一に学び後に花堂に学び書法及び弟事を修
免勅中書法は松花堂第三にして頗る所を得たり又狂歌
を嗜み狂号を牛庵といふ門弟数多あり世に行はれたる狂歌を
所々に出せり

我が歌は作意の自由なるをさとりてはやてきけんみんな歌
かく添て出せしを傍形なく狂歌にて自慢いろはちと卑下なりとも
志ろうべしといひしをもって

昭和六年八月廿六日在天狗ひけをしてをられと
まゝ行る人信海よいふやう勝尾寺よ義空といふ狂歌の上手ありいう
て彼まゝ及ふまゝといひなら信海ものをかく尺の筆とりて

秋の歌よみて行ものう猪尾寺のどぎつぎこうさせて見せませと

又西坊西界曼陀羅の冥眼を拝ませ人行りなら信海身不肖にて
辞退せゝとをいわれば是非ものく供養してつかはす

西界のまんてらゝと辞きするあるのうけん形きあれとも
まゝ或時近江国ある小堀政一の許へ常の場よ招られて切り的蓋菜
のさいまて飯くひゝて

かんのるまゝの数ゝまゝ行ふもかふらの名行るあ常の場

と称ゝよ人と盛ゝくるといふまゝ沼の人くり御子海苔よ狂歌
を掘ゝく帰りこせゝ西ゝくゝ

むてゝある海草海苔八名のくるそおくるさしの源川のそのの
と詠ゝく送りゝといふ元禄元年九月十三日殺尺高五年五十四歳

倭　和多守

和多守八姓を本下名八蕃章通称白木屋善三清といふ後ハ郎三郎と
改む芦深川黒江町よ住ゝ　綿を販きて業とし日本橋白木屋の分家
ゝて主人より内福なりれハ第くくり独ゝ亭和樽の門よ入ひ倭和多
守と号ゝ古歌側の判者くり壮年の比阪尚て狂歌をとゝ世
よ四ゝ元ゝ孫少ゝ元ゝ絶中

う形そゝ八ゑりて此ハ山よのみゝつゝ花の志ゝ痕
とふ狂歌奇人傳ゝを載せて人ゝよ称美ハ寛永二年十月朔享
年卒十五歳ゝを殺ハ深川象住町(旧寺町)法泉院よ葬ゝ法号
「貞室慎吾居士」とふ

山崎 探言

探言ハ諱姓ゝて山崎氏ゝ名春秀通稱を三平三郎とふ旧姓帝府
大臣番山崎信ゝて三百俵を賜ふ性風流を好ミ俳諧及狂歌を
能ゝハゝまゝ琴の指戦よ名を得ゝ當時山のゝよ斯乃の大関と称せ
らるゝまゝ琴文ゝりて一家を形ハ或年琴の名弘よ自称の狂歌を志
ゝて国歌を形りゝそのゝ形よ

うゝ川ゝ弟ゝの指ゝをゝりゝんの仁王ゝ揺ゝらぶゝゝよ咲くゝゝのうち
天保十四年七月廿日殺ハ享年四十七歳小日向水道端日蓮寺よ葬る
法号「玄探言仙翁奇山居士」とふ辞世の形よ
花ゝちりそのゝこゝゝ土よ拓ゝゝりせゝゝそハ跡よのゝれゝゝの業

宿屋飯盛

飯盛ハ姓石川氏ニシテ名ハ雅望字ハ子相通稱を糠屋七左衛門といふ始
年故ありて五郎兵衛と改む宝暦三年二月十五日生ル初名を清之助と
いひ山伏ヲ町三丁目ヨリ住ル後人名を業とし狂名を宿屋飯盛といふ
其ニ在府住昔六年木と唱へしより号を六樹園といひ老子南畝南等の
別号あり学問ニ志し深村源庵ニ師て和学を修め古屋芳陽ニ
漢籍を学ひしが血気まゝ定ル悪友ニ誘れ迷里ニ入りて放蕩を尽し
天明五年父ニ別れて勘当ヲ入り京業を励まし当時名聞
として張府徒弟の腰押をす所悪しき同業の中ニ連累せられて
志ざしまり行く学問を受ル志無解一を用ひられ定政

三年十月十八日遠江に於て捨ひをゆ源されぬ時に歳三十九形りしとぶとて
今八幡ふ[illegible]て涙をのこす
[illegible]けしとゝ人[illegible]
と一首の歌を詠し位則し家を跡よりて武州多摩郡[illegible]
りに暫し身をかせてうき月りを見て[illegible]
上れのてゝそ役せられし[illegible]
君をまち我ゝもまちあいま見ふゝふちうよりて注ひ[illegible]
と詠し述懐絶唱といふべし[illegible]
に移り住ミせの為すすひ[illegible]
と六りを結ひ性源語をいとゝ[illegible]

なりて世書京師縉紳家の間にもてもてはやされしとぶ又最も方を尽せ
しい雅会集覧の大著にして後進学者に益をかふること少からた
根岸八幡門四天王の名人にて名吟挙て数へ[illegible]晩年其名京師
に達し特に法眼に叙し宗匠の号を賜免せられしに其堂文い
やさ江戸にいとさる和文政十三年三月廿四日天岩鳴の[illegible]
享年七十八年浅草[illegible]町西覚寺墓碑撰お[illegible]法
号「山の移園墓誉五老居士」

山田早苗

山田早苗ハ別号を榴樹園といふ姓[illegible]田氏にして名ハ懋字ハ徳雄通称
を山田屋勝右衛門といひ赤坂表伝馬町に住し質物を業とし[illegible]

を四谷に立て老子の門に入り禁誦百巻に成り剃髪を檜樹園と云ふ或は
檜樹邨の産ぶるに故あり之を父法華宗の信者にて庭に梅を植え
発心して鎌倉に居り妙典読誦の功をつむ或年法華経二十部を頌誦
して家に残る文政二年鎌倉三十三回忌に当り墓前の追福のため
送誦二十八品の間「かきつ形くふるきさてらんこそうのちりいとなか
ほの月といくるさ前を石に彫りて四谷西念寺に建てその時に
苗の詠一首

世を捨て僧となせるは一き因縁の土里を地におきしに母
この歌は梅の天寧寺とふに父母を葬りし故因縁の土里を
地とは詠じ之歌とつぐし安政二年十二月廿八日の年譜に

らに四谷十町西念寺に葬る法号「檜樹院耕誉山田居士」
編者曰檜樹園山田苗八六樹園の門下にて五名の狂歌師
なれども墓碑を記し居るもの形し偶に苗のみ孫芝赤
羽根のほとりに住みしをつて編者の友人形る墓癖家
山口豊山子に子孫を尋ねとひ形く墓所を知りかれ一日豊山子
と連立て四谷の西念寺にいたり墓地をたま形くたずねて終に
墳墓を探り得たり第の庵にそのゆえらを記し面く

三世弥生庵雛鶴

雛鶴姓石堀氏にて通称を九左衛門と称とふ初代公旅渡庵の男
世一名大門通りに住し旭と呼ふ侍令宗真を世第に若年の比

狂歌をはじめ武隈屋の社中よりおひ枚栖居浦崔などうゝ場より昇月
堂の桂連よりハ江境庵北雄といひしゝ後年山城の国の香以より添く
ものとされ生文（香以の実文すなわち椒江園雛鶴と号し初代弥生庵の社
中と）の所蔵より係る初代弥生庵雛丸より来師二条家より賜る所の
「俳諧歌吟会」とつる額面と共に三世弥生庵の号を贈りて盃側の
柱梁とこれまゝ連名を巳水とゝふ恵水安政のころ盛んなりて赤羽根
数多ありし嘉應三年二月八日歿（享年五十五歳）谷中三河長命
寺に葬る法号「弥生庵徳山日玄信士」

編者曰俳諧歌吟会の額ハ今世弥生庵雛奥より伝へて秋庵に

桑和樽

桑和樽ハ別号を独々亭といひ源姓にして屋氏と名直常通称を
拾兵衛次郎といひ後より神田小柳町に住し歌結
を職業とし狂歌ハ秋庵三陀羅法師より学ひ後よりてた歌例
の舞首ゝ生名四方より四る文政五年より歿とゝふ墓所を詳ませ
辞世の歌より

養生もおけまひと書うけてそのゝ歌よりなりて注く

窓の村竹

窓のむら竹ハ姓を宮氏にして名を敬通称を千次郎とゝふ青山久保
町に住し野菜物を以て業とし号を青嶽堂といひ狂歌ハ朱乗芳江

の門人にて生名世に聞えり後年志摩の別号を授けて芳隆利華庵
と呼へり當時の一奇人(百家略伝及び拾遺誌等に詳しく述
事委しかれはこゝに記さず)或時十九文の銀を失ひて歎く歌
死ぬべきの年を十九と知ぬれは寂しびまゝのくるかふしき
文政七年十月廿二日享年八十二歳にて歿す辞世の歌に
詩を歌を達者ふ時に誠ておけとても辞世は無用如何ぞ
青山久保町智學院に葬る
編者曰窓の村竹の墓所智學院は明治維新の廢寺に成て
同所青原寺に合葬せり故青原寺に移て尋ねて其性を弥
失して法号墓石さへあるよりこゝに口をつきかねられ

萬年堂生成

第年堂生成は姓林氏にして仔細有林を剛と稱す青山久保寺に住
し年を賜きて業とせり性狂歌を好みて天明老人の小槌例に倣ひ項目
享四年と共に終りその月治命(遺誌)して當時の狂歌よりその名をの
こせり慶應二年十月廿四日殁享年詳あらず青山南町四丁目(元久保町)
極窓院に葬る法号「明誉宏善居士」

啓風堂 折方

啓風堂折方ハ姓高橋氏ヨリ通称平兵衛とふ芝宮田川町家主
舍八とふ者の男之助年の比赤坂一ツ木泉屋覺之恵方ニ年ヲ経て人と
形り性狂ヲあをなして手人北斗庵ヨ所道の教を受し後年柏屋某
の養子と形り外神田ヨ米屋業をせしヨ明治十九年九月廿四日享年卒
三歳ヨて歿ヨて中渋谷村天台宗東福寺ヨ葬る法号「心月自證法士」

風来山人

風来山人姓平賀名國倫字士彝通称を源内といふ始渓と号し又風来山人、福内鬼外、森羅万象、天竺浪人、等の別号あり贅沢志淡の人にて父は平賀定春東門と呼び高松侯の足軽役を勤む其先は信州の豪族平賀入道源心の末裔なりと云ふ源内性聰敏にして夫智衆に抜んで若冠の頃より大志を抱き高松侯の史に終ることをうれひ成長に及て仕を辞し長崎よりして蘭学を修め本草の学に志深く京坂を巡り宝暦の末年江戸に来り聖堂の傍に庵を神田白壁町に住居し又柳原に移りまもなく馬喰町に移りすむ又キテル只浣布なとを製し一まつ人参を培養し砂糖其外種々の物を製して国益をはかることかねてよりこれ

不幸まして一生せよ用ひられざるその不遇を歎じて遂に戯作或は洋
猫猫の作ふことを事とし居たる時い狂歌を添へて謝情を演ぶることもありき
ひらせ七変らう多く伽羅を取寄梅を製して是を源因梅とよび
彩吉原丁子屋の遊女雛鶴より贈りて一時世に行はれたり此時白鯉館卯
雲一首の狂歌を添へて源因に示せしよりあぐちに返歌せし源因の
戯文なり胸中の不平を演ぶしつふ冬章服れとを出れ八四めを摘て
たる記した
（三前略）只浣布工レキテルの奇物を工あり竹田近江屋義助と十抱一かゝけ
の思ひを形して変化秘の如きことを示した我は只おもふに日本
の益を形さんことを思ふのみ或いはまた大諸侯の為に謀りし事も

國家の大益あきらしたりとも猥鬼死して良羽高ぶれども
ふとて良弓蔵る細工貧乏人宝嗚呼崖の下我海蜜殊と悟りを
ひらき露命をつゐく営ふ時機しき因職して其糟をなら
ひその鍬をせしめんと思ひ付しをすゐこと卯雲木室君よ屋尾を
えおされ殆りおもふる狂歌
碎てきて岩物及せのおよ除は仕ぶしの梅をまゐる岩あり
実ぶ己を志ぶきはよ屋しこと己を知るよ伸ることあんいくいこの臣
養まうさんとて我やく八百を書ちぶ因ならり己を志ぶさる人よ
及せらまはのふ八歳吉八ら曰アゝ象う遠うこさうふ
かくは何とせん里のこまは物屋伯樂を形しかをひを形し

安永八年十月廿日夜馬喰町の家にて一時の憤らう人を害し是ゟ
ため捕られて獄屋ゟつふられ遠ゟ四年十二月十八日に成て獄中ゟ死し
享年五十一歳相模国泉寺ゟ葬ル法号「智見霊雄居士」

節松嫁々

是松嫁々ハ宮山常右衛門の女にて朱楽菅江の妻につかへ良人ゟ
教を受て狂歌を能ス是松嫁々ハ狂歌の戯号ニ良人公用のゝとまり
き時或ハ宿弟のおゝとまハりまゝこの家をも教へ導き其世ゟ良人のゝゟ
あゝんとかゝゝと云良人ハ家かゝゝ日花ようれいりき板橋ゟ内
ゟゝおとらゝ家を守りて少しもうゝめる色を形ゝ生涯をみゝ
形ゝ

らゝ必まさうちハ非とゝれ山橋ちらハい福をもつゝぐさらちん
年老て後孤月庵と号ス菅江ハ嫁々ゟ十三年先ニ寛政十年ゟ
殁せゝゝ聖寛政十年一周忌ゟ始め門家ゝゝ便々舘湖鯉鮒屋
主と形りて追福の狂歌会を催ゝ菅江ハ薙世の俳を閑居ゟ詠除
精舎ゟ建ゝ寄ゝ吉野桜を植添ゝとふこの時の萬歌ハ寄花
懐旧といつゝて是松嫁々ゟ向ゝ歌ハ

ときゝゝ見ゝ去年の桜ハさうぐゝ思ふ花ハ生ゝのおらまれぬ所

老後月の病ゟ歌ゝちふりゝゝ文化七年の四月の始

是ゟハ四歌ゟちらゝ必ゟ野辺ゝみめゝ生ゝの儀夜の月

と詠ゝ遠ゟ翌年四月九日享年六歳ニて殁す青山久保町志原

寺に葬られ法号「寥照院孤月貞系大姉」

普栗弱方

弱方は姓氏詳ならず江戸馬喰町に住し戯書を能くして業とし俗称を右衛門清吉といひ安永のころより狂歌を詠み狂号を普栗弱方といふ伯母側の孫人に或年友人の狂歌を集て左の如く書ひ置山人に判をもひ梓に上せて人々に与ふ其序に狂歌角力の溢觴とハ知るべしこの企終るを待て直く時に天明三年八月廿四日享年詳ならず浅草山谷観音寺に葬る法号「方岸普栗信士」といふ置山人の悼の歌に

歌角力夢のうちはをわらふ西のうぶへのうまりうら那一

生後百日飯盛ありて盛方つゐに光号の人と弱方の送志をつきてその命を終りしとそこの書狂名すまひ件と名附て斯道の孫書とハ今世に稀と弱方の一園忘に置山人仰願寺の墳墓にまきてくゆられ

一歌に

名に負てそその仰願寺塚焼の形られて子き月と云の歌

福蘭堂玲成

鈴成は姓奥山氏にして通稱を橋屋長次郎といふ安永八年九月三日江戸牛込細工町の家に生る世に愛物を業とハ性温厚にして人と交ることハ冠のごとく文章を好こと狂歌を嗜み初代便と鈴湘鯉翁の門に入て斯道の教を受け遂に師の和名福蘭堂の号を譲り受山の子

側の別名より列星或時天象といふ歌まて

富士天上行くそと空を仰むけはぞ〳〵見ゆる金銀の星

と詠しより当時この歌秀逸なりとて天保七年四月十日

高野山八十五年を経て浅草南寺町正覚寺に葬る法号「浄昌院教信日

受信士」

文車庵文貝

文貝は三河國の産にして通稱を福田林兵衛といつるあく狂歌を添て当

飾蟹子丸に教を受け文車庵と号せり天保三年六月六日歿す享年

卅四年辞世の歌に

祖先の年に死出の旅路は淡の〻福の島〳〵をいそてもらひき

深川仲左衛門町本誓寺に葬る法号「堪能恩受信士」

古河歌麿

歌麿は本姓吉村氏にして日本橋式部小路の家に生る幼名を芝三郎

といふ父は歌前屋某といつる質商なり後世芝に移る芝三郎若年の

ひより文学を喜び芸々と号して雅俗の連にあり書画を添め

弾琴戯場を好む事人に越えしかるに切磋琢磨の功あるかゆえ天保

五年河竹新七の名を襲ひ立作者と成り号を其水といひて狂云に新

奇の妙案多く就中盗人の狂云に妙を得て世に白浪作者と称せらる

その作の口吟に

何ぞ知らん月は浪の狂言をふるき歌舞をいつと盗みて

とゝり以て酒とまたぶ〳〵勉れをこの性温厚にして君子の風有り世
のこゝろ花柳の街に遊ぶこと妓楼に一客を呼せ〳〵を形とふ近年
まゝ〳〵脚車に物伎をたのむまゝ〳〵斯道の器斗と称せらる明治十年
の秋こゝ宋に名を讓り古河默阿弥と改称して世を遁れ隠居人
となり〳〵

紀伊沢井芝の浦辺に月ち〳〵田縁に長濱の志砂のたゝせる彼の
盗人の狂云を自負〳〵脚色〳〵ゆゑ白浪作者といふれも素よ
り知恵海濶にして涼き趣向の有ゝ之れハ神をこゝろ〳〵る功〳〵形
〳〵唯ふが如のもゝ〳〵くゝと祝の海に筆をとり〳〵を数のれいま五十
年頭に臨む連に御剛れの松の腰を曲りて白髪老さひぬ

れハこゝろ汝のゑきはと引いまひ〳〵とまゝ〳〵元の涙の素人に帰る
よゝん

勝の那きあろうさに亜示道志〳〵て義と世捨ふ蟹

明治廿六年一月廿三日浜子馬道の家に殁す享年七十八菊浜子小清
島町東門跡の添地源通寺に葬ふ法号「釋默阿居士」

當時讀賣新聞社にて默阿弥の追悼の為詩歌俳句お
を世にとゝめ〳〵まゝ志の人〳〵投吟せるを頼ゝ〳〵編者
こゝ左の俳腰を賜りこれハ筆の存に記ス

あくまで此俳をのゝ〳〵て玉石雷霆ゝりハゝゝ一世一代
功形りて名とけ〳〵君の思ひ千代佛の國へ身退くゝゝ

福盤門

福盤門ハ別号を壺星楼といふ姓大垣氏より出て名ハ盤門通称を伊勢や徳右衛門といひ浅草黒門町角東仲町より住し質物を業とし代々浅草庵市人の男子狂歌を文市人より授ひし号を其安林といひ壺側の俳人と成年父と共に社中の狂名を名乗りて沙弥

紀世音の境内ゆゑと形を建り

志らの山こ紅ハ志られてふをとゝまかゝらさせあふ鬼の姿絵

といふ歌ハ狂号作者部類に載て人のこゝ知る所なり文化十年八月九日享年三十有餘の壮年にて父に先逝て歿し沙弥松清町（旧寺町）禅宗大拙寺に葬法号「瑞岳淳林居士」といふ

文々舎蟹子丸

蟹子丸ハ姓久保氏にして名有弘通称を茂十郎といふ旧幕府の士にして俳諧方を勤む本所割下水に住せり多く俳諧を好み俳名を諧道といひしより後に四山人に強ひて狂歌を誘ひ文々舎蟹子丸と号し号を飾側の興首にして冬舎の号ハ四山人より始られしといふ老後号を飾翁と稱し社中最も多し天保八年二月九日歿し享年五十八歳墓所を詳にせざりしと惜むべし

常持

常持ハ初め狂名を我馬毛喜子方年といひ姓ハ蘇東にして連氏と名長賢通稱を三彦右衛門といふ浅草の人にして某家に仕へ主人故有て

仕を辞し、浪華六谷に住し、学匠をもて世を送れり性狂歌を好
らて初代巴扇堂の門に入り終に師の号を継き二世巴扇堂と号し判
者と成れり

そゝる形と思ひてのこそ有さに人のおぼきを
といふ歌は狂歌作者歌数多と載て人のそく知る所なり文政十年四月十
八日歿す享年五十余年辞世の歌に

極楽の浪人とあと形りぬ名ふりぬふいこの世のとまをゝひて

内藤牡岩迚ゑ西方寺に葬る法号「清光院連山浄休居士」

五車亭亀山

亀山八年迄南徒町に住し明治元年に徒士を勤む姓深田氏にして
新五郎と称し石美真志といひ五車亭と号し狂歌をよくして其
名世に聞り或年京師二条家より狂歌のをつきて使者を江戸に下し
いと六ケ敷をいまれしるを行りその時亀山より詠し
ちり紙の二条家よりのお使ハちんといつてをたゞもかまれし
と詠しといふ老後隠居して風月を友とし逝去せんとて
月花に苦界を厭れてそひそんとれも浮世の年ぬき女郎
と吟し是を形物として友蛭へ贈りしといふ天保十五年二月十九日享年
七十一歳牛込寺町法応寺に葬る法号「到岩院運巌五車亀山居士」

五清園方慈

方慈ハ姓清水氏にして忠義と稱し（堅仲達の男子）江戸の産川

の辺に住し業を販きて業となし故に方慈といひ後年照降町
に宮田といふる下駄店の株を求て之に移り住むるく狂歌を詠て
立老翁の門に遊ぶ立老翁深く方慈を求し一立の一字を贈る塵
外楼清澄まく清の一字を贈る是をもて立清園と号し明治三年
十月十日歿し享年六十九葬下谷南稲荷町唯念ちに葬る法号
「釋淳安良壽禅定門」辞世の歌に
こゝろ行の誓ひの船よのうの道乗る淳士南無阿弥陀佛

立葉園松蔭

松蔭ハ姓清水氏にして照降町に住し下駄今を販きて宮田といふ
（立清園方慈の男なり）つく若冠の頃より狂歌を詠て立葉園と号し

後に本町側に移り前尾の屋とといひ当時立側の巡老と
称せしに明治廿七年七月十八日享年七十一歳にて歿し下谷南稲荷
町唯念ちに葬る法号「清翠松蔭禅定門」

呉龍軒那歳

呉龍軒那葉ハ姓星野氏にして（三世徳馬屋頭祐の実兄なり）江戸
両国に生る故なれば武州日野宿に移り住む通称を政吉といひ十三歳の
時より麹町四丁目質屋（或又）にて奉公し後に徳兵衛と改む若年の
頃より狂歌を好み赤坂の狂歌堂側の剃髪都月庵駒鶴の門に初め
号を玉川亭政好といひ後に歌と改めり後年に及ぶ老人の
小椎側に遊び別荘と那称す千後赤坂小丸連と称して七宝亭一英と

世々二世紫馬屋の月並ゟ毎判せりゟの三てりを也孫連とふ文久二
年七月十日病て歿ス享年三十宗武公日蓮孫大昌寺ゟ羅ゟ法
号「昌強彩登誉浄月居士」とふ生前あのゟ像を画セ一幅と形
てそゞのうゝゟ

七物八起ゟてふ世の中ハ称ゟ おさゝゟ

と祖色ゝとふこの軸金玉川居蔵ス

黄金外成

黄金外成ハ姓辻氏ゟて通称を多三郎とふ日本橋四日市ゟ住
料理を業とス世ゟ八々料理とゝゟ又江戸橋の孫ゟ家居セ故人
呼んて江戸外ともゝ此ゟこハ亦号を外居と称セ故ゝ狂歌ハ初め

三浦雅法師ゟ学ひ後ゟ法ゝ亭の社中ゟ赴ひ後年宝市亭
と号ゝて宝連の弟首ゟゟ楓川舎、宝山人、等の別号ハ至清
堂、白毛舎、花宵庵、等ともゝて水魚連とふを設せゟ曾て詠
ゝ述懐の歌ゟ

さの歌の日を数をハゟて人形ゟゟ梅や桜をゟゟゝを形ゝ
天保年後ゟゟ赤永安政法を盛んゟせゝ人ゝ文久年間竹和泉
町ゟ移り住ゝ居ゟゟと形ゝゟ生後いゟゟ形ゟん勢ゟ人絶て有ゝ
歿年等ゝも定ゟ有ゝんとゝとおゝ むつきたゝ

五明堂五明

五明堂五明ハ姓高宮氏ゟて通称を儀兵衛とふ東海道戸塚

常陸人高中村屋某の男にして年九歳のとき江戸赤坂一ツ木泉屋藤
兵衛方へ奉公して八年を経て狂歌ハ人に少年屋より出るひ五明堂と
号し江戸赤坂狂歌ハ家を持つ商を業として世を送れり文久二
年八月廿九日歿す享年七十六浅草東門跡清地西行寺に葬る法
号「釋廣渡信士」

編者曰五明堂五明ハ故ありて二男高木定次郎の菩提所へ葬
せし形りとぶ

紅葉亭鹿成

鹿成ハ姓鹿島氏にして通称を万平といふ文政五年深川八幡前
町に産る青年の頃より木綿問屋にして慶應年間木綿

紡績器械設立を同藩に明治維新の初三井家より藩国に
商社の設立を同施して終に北海道にいたり開拓に尽し明
治三年王子滝の川のほとりに紡績器械を据急盛んに実業に従
事せしに老板日府紅葉亭に居して狂歌を詠て自のなしこと
し毎年初冬にいたれハ雅友を集へ紅葉会の狂歌会を催せり明治
廿四年十月廿九日歿享年七十歳葬世の歌に

百のうちつくし此月をおもふそくれしと人のいやらん

法井共同墓地に葬る法号「紅葉院鹿屋徳弟居士」

永日庵其律

其律は尾州の人にて姓久野氏と家号を橋屋とし通称を與四郎
また助四郎ともいひ元亨と号し松尾流の宗匠なり
牡丹は油煙斎負板の門人なれば永日庵と号し尾州より古くその名
聞えしかどもいまだ門ふる浪華の木端俳諧の許へ
木の端と名をたてれば雲のあれど氏とかく油煙の後香を去る
と詠ぜし頃しとふ宝暦十年十月十七日歿年三十四年四十七回忌辞世の発句
晩秋んでいつれへまでも知らぬ事は古むかし

毛柄器持

毛柄器持ハ姓平澤氏ニシテ享保廿年三月廿一日生原名常當通称左平
格とふ久保田侯（佐竹家）の留守居役狂歌ニ初名を淺黄裏成といひ
ち改まりて毛柄器持と改め俗名を月成といひ戯作ニ毛三二といひ狂
詩ニ韓長齡と称せ又明誠堂為山人等の号あり狂歌狂文一家の
新を形して人の意表ニ出るもの多し安永天明の比ひまつの双紙を著
せしの就中「文武二道万石通」といふ頗る世ニもてはやされ古今未曾
有の大當り形りしとふ寛政年間故ありて戯作を廢し毛三二洒黄裏
成の号を門人芍薬亭ニ根ニ譲りて仕を辞し剃髪して後芋の
形き人と形りしそ自ら平荷公和と称ス文化十年九月廿日享年七十九歳

こて殺せし浄川浄心寺塔中一条院より賜る法号「法性院月成日明居士」と
いふ辞世三首の図よ

牡丹をもちうちいま柄の長持とよるぬ多んてハ日柄のぼることち
死ぬるとて死ぬまハ行く末とお年ハ八十ふ長寿と人やいとん

出久画坊画安

出久画坊画安ハ通稱勝川文吉といひ江戸人形町より住し絵馬の額面
押絵細工等をもて業とし則二代目勝文之画をうくして画名を春山
といふ性牡丹をこのて天明老人の小槌側より迎ひし日側古来の作者う
明治四年二月廿日歿し享年詳ふんに本紙丸山本妙寺塔中妙雲院
より贈られし法号「顕壽堂長達日寅信士」

天明入道

天明入道ハ天明老人とも号し姓小谷切氏にして通称を甚五郎といふ
元来大工職人なりしが牡丹を好みてよく天明のひとり尚時ハ名の牡丹
師と変り牡名を下る図匠といひ別号に語楽又花深山人といへり
むかし唐の月ハもくうよりかたくるの水を画てから州よりの係
み丹を最も得意の作にして人をゆるせし虎の絵之ハ如此安政の比を
盛んなりて山城河内の秀吹よりおとされ日本橋箔屋町の家より牡丹指
南所といふ看板を掲けて社中を小槌側といひ門人を取立て牡丹
をもて一稼の業とせしこと若くり牡丹堂主顔とみて天明老人の二人と
す当時初代三笑庵主も一家の名を称て牡丹を称し四方著書ハ多

廣重の画を用ひて寛文元年青蓮院尊賀法親王の命によりて
夏花の宴を法の車とそなへ給ふ子供よりつゝ
海内西福寺に葬る法号「照月院清山居士辭伝士」

庭訓舎綾人

庭訓舎綾人はもと第綾人といひて庭訓舎は別号なり姓久世氏にて
通稱を千兵衛といひ本府三四目録町に江島清傳といふ有り其門に
信一第道の師匠なり狂歌は本府側の判者にて名高き門弟多き
折ある時机上の硯と題して左の如く書り

水容の山高く流れて世界河の末と思ひ筆架の山に
登る毛筆の海を渡りて更級の秘を常に月まさら

如硯屏筆を乾さぬ文猛飲感矣書樂矣凡
文化十年三月廿三日歿に享年不詳辭世の歌に
とりあつめうつもの怪我を即菩提とはらふ事の弥陀佛
本家書塲東江寺に葬る法号「真盛院庸春綾道居士」

朱楽菅江

菅江は姓山崎氏にて名景貫字道父通称を々助といふ牛込二十騎
町に住し旧幕府の士にして因幡彩先生の門に入りて廣く和漢の学を
修め最も和歌をよくし法年京師儀同三司日野資枝卿の門人と
なりて和歌を学ひしといふ菅江の名は初め能名貫之といひし故人く
貫之と呼ひしを菅江と書しとそ中比菅江の名は

漢江と改しゝ日光宮の道祖主の世せゆひて芙江とても若きゝ
まゝと伝せられしゝ事ゆまさえたのごとく芙江と書しとふ所こそ朱赤の
二字を加へしゝ安永の比我あるよて人こと江富を開しゝ時傍ら彫る行
燈の紙へ「我のみ知りてなけら芙江」と書しを時と比又淮南堂、朱赤
舘とを号し長坂下谷池の端よ隠居しゝ久しよ水の前よ白き蓮花
の咲しゝて芳醍利華庵とふ（浮よみ号い窓のむゝ世よふ〳〵とふ）
なる年京師より某々と向ひ門人ゆれい所自見伝ら
れ某々の伝せるハ近来生方狂歌を学ぶゝ人及べり歌
をつゝえし程よ一首添ゝしゝて天とゝる歌を詠むゝれハ
芙江とゝなへし

恩業ふすめぬものゝ世めるものゝほゝて手ほ京と形ゝん
と詠てゝゝれい某郷佛の外蔵しゝ浅ひしゝとまゝ立生蔵の所薙髪
せんとて座神市谷八幡宮へ詣眼をひよ詠ゝ
まさこゝきのたゝちゝの男山かゝさ（まつゝる身とい形ゝまき
狂歌大祈を若しゝ斯道後進者を導しゝ少ゝし元文三年十月廿四日
生れ寛政十年十月十日享年八十四歳を辞世の歌
執筆の心安安なのこゝゝん〳〵昭の掘さゝ〳〵形の月
青山久保町青恩寺よ葬る法号「運光院茶安道文居士」

秋風女房

秋風女房ハ狂吉原京町大文字屋二代目市左衛の妻あゝ俗名をまのさゝと

いふ性狂歌を詠て称風女房とふ人その狂号こまく雅名を木綿あと
いつり

秋さめと風ふきぬれば朔月のふうしをきりの一葉ちらして

とふ狂歌ハ作者詳なよ載て人のたくさん志ゝ歌ゝ生絶天明時代の狂歌書よ
ひろく世ゝ人ゝ文政九年九月千百歳と言年卒七年海号を永住所
秋念寺境内本秋寺よ葬ル法号「釋永保妙壽信女」

在明亭月守

月守ハ姓林氏ゝて通称を清司とふ旧紀州侯の家に仕酒を好ミ
まゝ和歌を能くし二世画賛人と名三の友ゝ壮年の比吉原ゝ梅の廊
女郎衆ゝ深くおもてて是繁くゝ通ひうしを画賛人の依めてる歌よ

酒ハ春ゝといふまゝ酒よのまゝてを形うれ姿ゝ心ぢを枕よ
まゝ形とふまゝ山ゝびゝ花ゝてをふうれ

古代のゝの浦鶴ゝ名ゝをうきゝる亀よ形ともゝ

と題名ゝて送ゝうゝ返ゝてをしゝて長名ゝ長明の碑を賞ゝ

仇ゝ咲く花の園ゝ花ゝうゝて面ゝ白ゝ春ゝの花ゝのそのん

千歳ハ好ゝ酒ゝ之性ゝて深くハ嘗ゝ尺ゝ老後ゝ仙のゝ

物狂ゝ歌ゝ多ゝて明治十六年四月百歳ゝ高年九十九歳辞世の歌よ

夢ゝ之外ゝ世ゝ之ゝ移ゝ行ゝ世ゝ人ゝ百ゝ年ゝ生ゝ死ゝ山の山路の桜ゝ花の文字

秋津島人

秋津島人ハ肥後国人吉城主相良志摩守藤原頼徳の俗名ゝ狂歌ハ

を長政守也宗之の二男なりしを兄政宗郎義休病身なるを故長宗之に
慶長〜寛政五年三月積德を嗣とし同六年十月從五位下に叙し
志摩守に任じ柳河侯となり享和二年四月父を亡ひ同年十月其遺
跡を継く性酒色なりしを風雅を好み文化の比世に行はれしは狂歌を
嗜みて狂歌堂と號の門人迎ひ初名を織月亭杉津島人と号し
文政十年六月十六日歿年六十六歿仕赤坂田町の下屋敷に隱居し迎ひ織月連と称
を部〜に多くの門人を有し業に勝れしを若き人の一字を許して
判者となし世に是を相良例月号免許の判者といふ天保の比麻布
海軍子文り月並の会に出席して當時の狂歌師を交られしといふ

安政三年十月朔日歿に享年八十三葬麻布笄橋(元渋谷)光谷寺
中大安寺に葬法号「叡京院殿織月雅逝大居士」

天廣丸

天廣丸は別号を碎象亭といふり姓(藏カ)碓田氏なりを通称を廣吉と
いふ相州鎌倉の産にて青年の比江戸に来り四谷鮫ヶ橋に住し井田某
に就て易を學ひて出藍の名高り狂歌に唐衣橘洲を師とし碎象亭
側の制者なり性いとく酒を好み常に德利を放さず他人のおとしく
ことを嫌ひて携へて飲すなり呑ひきりとて衣服迄を徳利の絵を附
すりとふ、好酒家形しを知るべしされば酒の為に成を忘し
家貧しくして れは而いとれとも出根のよ人を形なる故に拾遺一ら成ばこの

廣丸の家にて狂歌の会を催し人々お集ひしよおもしろかりしを
天井ちらちらされハ人々落しきの内より傘をさして席巻を果せし
といふ実に一奇人といふべし是て酒百首の吟なり生涯に
人生酒ハ芸風流の眼あり月を見るも花を見るも
といふ歌ハ皆人のよく知る所の狂吟也老板車前石原より移りすみ文
化六年三月廿八日享年四拾四にて歿る辞世の歌に
心ゆくハ人を酒と水鉄のなりし人残の形きく人
麻布宮井町(元市兵衛町)善学寺に葬る法号「栄誉浄教信士」
編者曰この天廣丸の墓ハおそらく世よりしる人稀之編者もかつ
て尚見しことなきかゆゑ物ふしこの墓に物ていることを
かしき一奇談なれとこれハ記さん掃墓餘談をうたてあるべし

暁鐘成

暁鐘成ハ姓木村氏にして名明啓通称弥四郎といふ大坂の人にして日蓮福
井町に住し和泉屋と称して醤油を釀造を業とし幼時より読書
を好み壮年に及ひ放蕩不羈にして旧来の業を廢ひ家をあて天王寺
中寺町に住し宿前にはまるの萩を植え庵の見を飾りて楽しとし
あの狂名をも庵の会真萩と呼へり後心高槻通博労町に移り種
々のをうしき名をおもせて時勢を駁きしう幾程を形く是を廣し
江戸堀南通り一丁目に移し激徒ふとしを楽しみ又演劇を好み殊に
中村芝翫を愛し芝翫雑劇集等を著はし晩年

丹波國より出き福智山より遷ふ偶藩主板倉氏江守と領内の民とが互
に事ありて命ひしの陸成まふらう使者ありて民の為に訴訟
を作りやうしよその意意達せさりしかは再び檄文を送り終に八一揆
の巨魁と仰ふ於たいすりくるる事法まるに及ひ陸成八主謀者と
目せられ逃因の身と成りしかは延元年十二月十九日獄中に殺る享
年六十八第西蔵郡浦江村西覺寺に葬る

網破捕計　金

計金八姓菅原氏にして名慎言字有和通称を三左衛門と云梅園
または静廬と号す家根磯をもて業とす「名人忘展録」に山家俊
昭の門人にて元禄迄のすきといつる料理兼待合茶屋の名知名

定次郎といひ家根拵梁の職に成りて茶屋ゆめうの主網の社中に
て狂歌師となり網破捕計金といつる一家古市のせがとといふ所にて
性又狂歌を度して世に聞る能り終に博識とあり双曲亭馬琴等も此翁
に事物等をまなびうとふ此人博識なるハ世著梅園日記を見て知
らるこさうを根底原き世に者に似ず風雅の之しく詩歌の類に華ふと
狂歌をなめりとて）當時江戸の三左衛門の一に数へられ其書類る
多〜ありて永元年二月廿九日卒す享年八十四第西久保天德寺塔中
教受院に葬る法号「高岳院円照信士」

編者曰小静廬の墓所ハ諸書に天德寺中教受とありと墳墓
の所在分明ならス編者再三問寺を尋ねしかと見あたらさりしいと

惜むあまきを形り諸書ハ法号を記しいるを見て右ハ記し法号ハ
編者一日東京圖書館ハ四きて戯作者撰集といふ冊本を見て右の
法号を記しいるものなるべし

天迺門都　龍

天迺門都龍ハ姓藤原ハ山本氏之通稱を嘉兵衛といふ江戸日本橋
通二丁目ハ住し世ハ家を販く業とし牡丹を好て梅垣側ハ列りし初
名を雪井都龍といひ後ハ天迺門と号せり若年ハ俳業といひ吾曹を
ぬくのやうなりける年表（緑西江といふ）を僅主として牡丹若葉賦集
といふを著ハしいう後年德翁と称し秀吟なきこと多くある年の
元日ハ

うれしさのくふの心ハくらふれハきのふの去年を何をしみらん
と詠しとふ明治十年十月廿七日享年不詳浅川洋心寺墓中玉泉
院ハ号ハ法号「浅壺院德翁日壽居士」

あ

三陀羅法師

三陀羅法師ハ本姓赤松氏ヨリテ名西住字已其先ハ信州清澄院
の道晴昌の苗裔ニ坂武州豊鳥郡ヨリ移リ住ス本末七世ヨリ海安永
の比神田お玉ヶ池ヨリ法華堂某の養子ト成リ法華氏ヲ襲フ寛延年の比
より書を学ぶことを始メ和漢の学ヨクスクヒ職業のいとまに俳諧を嗜ミ
まゝ狂歌をつゝり光ヨ学ビ和号ヲ孫庵一葉トシリ狂歌ヨハお
うき名ヲそなられと一葉いふ文字をとりの侍ヨちなつと一葉といふ為め
神田例正連の魁首タリ世ヨ狂歌の名人と称せらる社中ヨハ純ミ亭
和楽を始トしてヨ芝橋堅丸ヨ柳亭唐丸宝市亭外成歌と名及
ひ判者タリ多ク〳〵法師の聽を問ふ人ヨ一貫の歌をえて差へり

目鼻所ゝ彩ハ[illegible]れをおすゝろしゝ玉人の口きゝ人の耳
まゝ最を得意の吟とし世よ吟えてゝ
妻そとハ夫よ偽りあきをのを形とうそ空き風の吟らん
世所のあり[illegible]をかゝ[illegible]非ハ松もゝくまたのゆゝこの夢の宮人
これゝの彩ゝ老板雛髮しを一品葉の号とゆ柳亭よ譲り三陀
ゝ法師とゆふた玉宮政より文化の比を最を聞んよりを風源よ世を
送れり文紀十年八月八日殁ゝ享年詳ならゝ本浪元町四丁目等寺
正寺よ葬ゝ法号「清信院釋一葉居士」

酒上不狩

酒上不狩ハ源姓ゝを倉橋氏ゝ名格通稱を壽平とゆふ忠川春
町ゝ壽山人ゝを号ゝ駿河ハ島産の産ゝ[illegible]て山岸書町よ住ゝ
故よ忠川春町とゆふゝ男系の沢を浪先生常花の芦ゝゆふ紙を著ゝ
ゝゝ慢ゝ雨切却日記を著ゝて名聲一時よ冠ゝ生徒ゝゝの著
作ゝり是ゝ為宝暦以来草紙の[illegible]ゝ一変せゝとゆふ寛政元年七月
七日享年四十六年ゝ殁ゝ因ゝ牡若小垂長成院寺よ葬ゝ法号「寂
静院廓誉清水居士」とゆふ著世の作よ

生涯苦樂　四十六年　即今脫却浩然帰天
我をゝゝ身ハあきをのと思ひしよ今ハのきハそ苦ゝかり色

酒上熟楳

酒上熟楳ハ藤原姓ゝして嶋田氏ゝ名友直字左内市右左内仮ゝ住ゝ

て世を荘厳す。熙春八代目の主人より世々酒を好まず狂歌を詠ず。狂名を酒上熙春といふ。江戸にて狂名の始めとす。寛永二年宝合といふ会を催し、牛込京町恵光寺の書院をかり受け、其宝物といふ札を弾りて運び入れ、四方八方の宝物と思ひしに戯れ作る物のみ。されハ人を怪しとせりしとぞ。（此宝合の記一巻、京谷左内坂屋田屋所蔵）寄せ楽酒しを瓢の空洞（カラ）とかくこと。天保四年九月十日歿す。享年六十一。墓市谷谷町安養寺。墓ハ法号にして「山善院敬深誉春願居士」

山東庵京傳

京傳ハ姓岩瀬氏。名醒字西里。通稱を京屋伊藏といふ。醒々

高野寺花亭等の号あり。其居府中を宮山の東京傳のほとりなるをもて山東庵といひ、京屋伊藏と稱せしよりの号なり。京傳といひしを始め画を北尾政美に学ぶ。葛飾応為、菅原政演と稱し、狂歌に身軽の折助の戯号あり。著作の書類多く、勢中近世奇跡考、骨董集の類ハ考証精確なりと。小吏を補ふ。寛政十三年九月十二日、享年五十六歳。墓を弘法寺に。両國回向院に墓。法号「辨誉智海京傳」といふ。歿後文化十四年、夷舎第京山に兄の為に机塚といふを海に沈む。世号塚内に京傳の文と狂歌あり。左のごとし。

ほそ〳〵と生てふ〳〵の二月三月の蝶の花といふ。師のうまいうちて

いつはりそめしうり売のこゑまりし文はくゑふん此つ花

まハあり仁ほされいつくりさゑをあろそろまをゑひてるかさハ露
ふりれとまふ〻〻拾仁とそ〻ころゑのを〻つて加さまふをさら
仁思うつ〻てるし〻そ〻ハ五十よちら〻〻行くれとつ〻れる冊ゑハ百
部をそ〻そ〻てり仁ハあのっ〻ころ〻ゑ〻〻ひをはれ〻〻うまふこを
かゑ仁ゑゆくゑいつ〻〻ゑゑ〻じろきっちゑゆめこふと〻〻とそろあハ
ゑ老〻〻〻ゑるさゑゑふハ百それいろふハせん

山东庵京伊

耳をそ〻ゑ称百〻をら〻けてをろとゑゑ世ゑふる机ふれを老そ〻ろ

文政四年丁丑春二月　恵斎　京盤溌百樹書

山东庵京山

山东庵京山ハ姓岩瀬氏ゑ〻〻と名百樹字孫梅称の通稱を利一郎と
いろ孫笑堂ゑ〻〻方半居士と号仁仁保山侯ゑ仕へ〻く坂病の為ゑ
辞し〻兄京伊の旧宅ゑ移り住て著述を那仁まゑ牡丹をを詠り
天保九年二月晦日七十歳ゑ刹去〻〻京伊と号〻〻古稀の賀延
ゑ書画会を催せり其の時の辞ゑ
人ハ四ゑといひ〻〻萬好を六十ハ年の豆を数へ〻〻いろまめて〻〻と
思をそろんやつれて年七十の春ゑなひて女こそふめて〻〻とて春
ひぬれと何をそろ形〻〻えるふをを那ろれハ法れ〻〻世ゑそ〻て京
もく犬のあいろふゑ〻〻り世ゑ〻の中の音ハ我ろうまれ〻るゑ延
せゑ報ゑまくらゑ〻〻人ゑをなふハ詩の歌のとをゑの賀ををめろ

はべきまゝ久病よりて仕を辞せ〜板八士高の沈石ひの樹の木
ふゝ四夜浪人ふれいうそこうのまえをとゝきされハ古稀
を壽く盃をらくゝと名よいふ茶碗よかへ金のにえ言をこのとせ
の松風と称ひ白を岸に茶よのこゝろつゝ心うさごうの楽をと
りゝ所ゝをあゝいろゝてるけしの花かをうし風よそうあろ
ゝ所坊主影うの清ふ所るがうゝ色ゝ我をまゝ百年よゝそ
ぢゝゝぬまゝくゝよあいえゝ所を世ろのまうゝ見けよかゝらとねめ
むつゝきゝろまをゝあゝゆハ心ひゝろゝして寿あのつゝ老袖
の花をゆゝふゝんゝと此日の生天を所ゝをそのをゝそさゝゝめ
ゝ所さておゝちふよ裏のハ水よなゝゆゝふ流ゝきゝ行姉の月よ国

この新法師ををうゝゝんと友人よかゝうゝれハ発三李四のでも
坊主をゝをゝゝ称ハ制数年賀をこ年ませて一世一代まゝうせんの
書画命ををゝよほゝゝ孫へゝれゝゝをちゝゝをそんゝとまゝす
き心まゝけゝ旧友のすゝめよまゝうせてその屋ハせるまゆ忘人の影を
かゝうれハその所今の形ゝとハ別よゝゝゝつ詰君の光賀を松
よゝゝゝゝゝゝほゝゝゝをなゝれをゝゝまゝれかゝ

十徳をけふ羽衣や松の翁身

を保九年九月十日　幸昭叟　山東京山

佐野渡

佐理流ハ藤原姓なれども田沼氏と名乗り佐渡守と称ふ
久保町に住居初代より文学を善ひ殊に和歌を好み朱乗茂江の門に
進ひ和名を国府吾義と称号し後に佐野流と改め別号を三
樹園と云ふ又侍伴舎、擁翠堂、芙蓉楼あの号あり又
仏を画くこと妙なり帰休亭、湛園、看香庭田と、紫山等の画名あ
り初老の頃より書法を深く究めて独得の妙域あり新年草書
をたくして彼俗の風景を賞すべし老後家を子に譲りて京都と
云所に茅庵を結ひて隠居し窓の梅花斎玉堂翁玉秋毛
堂、四谷庵等と号し二の友として風月を楽しみ以られ風流を尽と
しかり云へども世実母の果の賀に四方の友に請き歌をこひられを
辱風に乗して賀筵を設きこうこの時酒あ歌く
嵐ハ吹けて花くまもなけれども息る株年八の祝をことほれい
天保八年四月吾別墅にて元の坊主と称し其の時の辞に
世に人の歌ひまを知ふ人為佛まうして返世歌ふ
るも花ふ只撃の毛の風に吹けるる飄の如きあとハふ
れともうくさきまくに花くまを見まうろう
四季の首に加るの毛ハ形をさくに佛に成ふる氣でいふ
七十六歳まくりうう　元吾坊主表
無くに日年三月十七日終に定命年七十六年吉山海義ちに葬所法
号して「堂殿隙徳林女果居士」

初代燕栗園子頼

子頼ハ姓西村氏ニシテ名千頼通稱を極富といひ燕栗園と号ス
ゴセ幸府押上ノ住ニ國学を主として世ニ聞えて性狂歌を好ミ一号を
雑體吟社といひまた顔ノ四方側の制者ニシテ秀吟頗る多シ号して狂
歌堂主顔の養女を娶りて妻とス天保八年一四月廿二日歳甲子ノ歳
にて没ス享年七十余ス男西弼といふ者茶毘一片の烟となりて焼骨
を推乃ヘ葬りて云妻の墳墓ハ今柴せ丁といふ法号「雲清院極二百
日光伝士」まゝ墳墓の左側ハ先のかきし子頼とまた顔の歌を彫り
たり

妻稲ゐを烟と那ゝ〳〵ゝ相谷といふ所よりまゐりて焼崩れ
ゝ法屋のいとまの形きさゝゐふるたきのふまて名を立てゝ
とゝつのいろきを何ゝと所なれ恋ゝゝて　燕栗園子頼

かくまろり初ノ為男を形ゝとハ都ゝ数一次の男多ちゝて又ハ
初人の杖ゝ〳〵らとゝゝ〳〵ふひるまゝてゐ頼ゝつちハしる姫の
初秋のほとゝろゝ地をとゝるひぬときて俄ようせゝ〳〵ハ於ゝ
烟りまをと叙ゐまをまをの恋ゐを労るゝゝ〳〵恋ゝゝ口を
ゝゝて　狂歌堂主歌

ちゝゝ稲を焼栗ゝを鳥屋聖ゝゝまぬ牛の老をほとゝ免

とあり墓所ハ芝白銀榎本谷ニ立行寺の丘上ニあり

二世燕栗園子壽

二世燕栗園千寿ハ武州児玉郡八幡山の産にして本姓糸氏之丈
を之右衛門といふ千寿ハ二男なれハ若冠の比江戸に来り小船町辺の商家
に成人して両国吉川町の書林文会堂の養子となり通称を山田佐助
といふ狂歌を好みて初代燕栗園の号を継ぎ二世燕栗園千寿といひ
志頗る四方側の判者なり当時斯道の路人と呼れし 至清堂と号す
りかくて守らるゝ如く並び称せらる緑中巴文の家に好をえて秀逸
支きけるも

白髪の白く成るまて何ゆゑしられたる人ハ甚く衰ひぬる世に

といひし人口に膾炙せり社中にハ瑞以社(後に三世千種庵)英学社
(後に二世東米庵)等の名ある判者有り其外楼内判者諸国に多く

中より出たりけれど安政五年八月十七日没享年七十五浅草誓願寺
塔中林宗院に葬る法号「忍念瑞守信士」といふ

佐屋裏襟

佐屋裏襟ハ姓秋葉氏にして名高令通称を篤之丞といふ元来上
総国武射郡山中村の名主吉川清左衛門の二男なりしが故ありて秋葉
氏を継ぎ寛政年中江戸に来り享和二年より文政二年迄凡て十
七ヶ年甲斐国山梨郡府中陣屋に在勤しられハ狂歌書にハ多
く甲府と記しられ甲州の人に狂歌を教へしも前に記せし如し 其後
越後陸奥大坂等に出役し終身各地に滞在しける狂歌ハ六樹
園に就て学ひ別号を錦縄堂又衣紋亭などいへり例の狂歌判者

永教よハ

京子ハ島をぐつまちとも島を高ゝとあり名附らん

とふ歌を載せり天保十年二月九日京の年六十三歳にて没し浄家

松巣町本覚寺に葬ル法号「宰静院法禹日敬信士」とふ

山陽堂 山陽

山陽ハ本姓小島氏にして板倉氏とふ名久英字如門通称を

市郎左衛門といひ芝増上寺の医師之性狂歌

を好み天明の比春屋亭の門人となり狂名を大井子尋ゆる三河意

觀と号し又四方山人と称て狂詩を学ひ寛政二年山陽堂と称した

めるよ朱乗芝江唐衣橘洲の両社中より迎ひて板真顔の社中

より別り寛政八年四方側の判名より別て享和二年芝廻と号し文

化十年上京栗の本狂歌所を建て人の免状を嬢ゝ子に著書ハ

芝雲集、蕪の実河、源氏双六、三十六歌撰、狂盟帖狂歌年代記、四方

山つれ歌名尽、等なり文化年中板中小殺ルとふ

編者曰山陽堂ハ板中殺やうといへども吉程ちよ迄骨を葬り

こと勿論形ちこと程と甚しくて芝二年板嵯峨寺に往葬ル

の寺形りしことをゆゑ知れハ日寺より称て尋ねて命日あり

に狂歌しきこと板墓銘ハ詩よしこと

奇々四羅 金雞

金雞ハ平姓にして畑氏之名秀 字を通雲 燕石斎と号し觀奥

道人ともいつり其先八牧田の氏にして世〻上毛七り市の領主にして医を
以て仕へり金雞若冠より風流に志深く南京楷海の門に赴ひ学び
雅金雞、金鶏翠客等の別号あり三十六歳の時仕を辞し京
師に遊ひ寛政三河國に至り年を重ね諸國を遍歴して後江戸
に帰り浜字格蔵のほとりに庵をむすび風月を友とし花鳥
を愛して心のまゝに世を送りしが文政六年四月廿八日歳に高年四十三歳
にして亡なる尾花覚寺に葬る法号詳あらず著書八金雞医話、牡
丹百歌、全書雲英抄等世に刊行せり

紀定丸

紀定丸八姓吉見氏にして名義方通称を儀助とふ元八清水の住能

頃ろ〳〵若葉たゝ世〳〵源四位さゝ陰かゝくゝ[illegible]

返し

ゝる秋をぼゝ〳〵四位の実のゝき年八年〳〵降る答の事

○

降るゝすいとゝふを雲の凡まゝてゝふハタ〳〵ち来へき雨形り

千世世よ雪ゝ之し影ゝゝ天保三年四月十六日享年七十六歳にて

殁に本銀元町三念寺よ葬る法号「暴進院平生日勤敬翁居士」

旋世の影よ

狂歌師をゝふゝ世すゝ形るより紀宣丸をさゝめ形き世よ

編者曰紀宣丸ハ俗名よ表ロ裕筆ありと伝れと武蔵よ[illegible]

えに祷りゝゝと或る老人いゝゝれゝり家よ記せ〳〵伝ハ

詩歌俳百人雑とゝふ書よゝゝ〳〵居彩牛込三丁目薬屋

田亭馬琴

馬琴ハ姓瀧澤氏ゝて名解字瑣吉著作堂と号ゝ又ハ裏笠、

玄同、信天翁、狂斎、思出人、等の号ゝり明和四年江戸源川ゝ生

後年飯田町の永寿寺と形りゝゝ俗務ゝゝて女婿よ譲り文政七年

剃髪ゝて篁民と称ゝ住後四谷伝濃坂よ移りすむ琴ゝゝ

差冠の伝山東京伝の門よのり大栄山人と号〳〵戯作せ〳〵文政大栄

山人とゝふ名ハ源川大栄山永代寺門前ゝ生れゝれハ斯名ハ〳〵とゝふ

き

世にも晩年大栄山人の名あるを紙に坊間を探りて収没し又
京伊の門人といふを深く秘して人に語られず大栄山人の号を琴
の初号なる事知る人稀し寛政五年曲亭馬琴と称したもこい
元曲(クワウキヨク)倫馬琴(ウマコト)と戯号せしを深く感じ雅懐を表の歌をこ
もれて
はるかなるとしの袋の形のよ似ていふ雅のをまのもろまち
と題し(きをいうよりもん語りて)とそらまの数と書ものれいこ書
そこ稿ちといひつそのを佐筆を法けを
とそらまの浦のとまやを書られいかの碎ふ門の梅の花貝
と即吟よ恵しかバ人とその文よ加んじたりしといふ老眼病

の為め盲目となれと雅著作を廃せし後の八犬傳のやき未編い
なりてい娘よ筆をとらせて其の稿をつくりしといふその時の述懐の歌よ
筆捨の松の古墨を三云の業も子ふよ為ふくかさるそうき
志永元年十月六日歿氏享年八十二世年辞世の歌よ
世の中に役をのうれてとるのきかつをそなめとつちの人形
小石川三観坂深光寺よ墓る法号「著作堂隠誉蓮華居士」

兎玉堂兎玉
兎玉ハ姓佐野氏ふて兎玉堂と号ハ通称を三升屋六兵衛といひ本山
市ふ大工町(今ハ南町三丁目)よ住ふ菓子を拵きて業とハ早く狂歌を添て
初名を三升鶴包といひ数年京師栗本狂歌府稿波曉先生の

人と形りまゝ赤坂小平治屋敷の別志ゑて書就白虎朱雀玄武の四
神ゑかゞゝりしその主人(就潛庵、虎風堂、朱雀園、玄玉堂の四人
をいふ皆小平治の別号なり)ありしとき猫といふ歌まて

三味せんゑ四のりかゝりて初〳〵ハ猫を柱ゑ孔ひきそゑ法
と詠し歌人秀逸形りと人々ほめそやせしといふ安政五年八月八日歿し享年
八十歳原宿村土安寺ゑ葬る法号「専誉浄願信士」辞世の歌ゑ

彼の西へ長けとふハ外ゑふ〳〵浅ゑ六字名号

初代琴通舎英賀

初代琴通舎英賀ハ姓森氏ゑして通称を左篤といひ神田豊島町ゑ住
し古ゑを業とし家号を丸屋といり故ゑ人ゑんて丸左といひ狂歌ハ住

訓舎綾人を師ゑし琴通舎英賀と号し後年ゑより松寿連の解
首ゑり平素弘法大師を信仰しゑゝ世西新井大師の境内ゑ自誦の
歌の碑を建りその歌ゑ

四國八十八ヶ所の霊像を写しゑりゝれい　琴通舎英賀

かけうつし四國なん路の美場ハ後世をこちひく法の栄因者

天保十五年七月十四日享年七十五歳にて浅草本願寺塔中教覚寺ゑ葬
る法号「釋英賀」

二世琴通舎雅海

雅海ハ姓平野氏ゑして通称を忠八といふ元駿河町三井家ゑ八の大工棟
梁ゑて呉服格外道壽屋ゑ仕り後ゑ日本橋通町平目ゑ移り

工業を慶〻として袋物を販きて業とし若年の頃より狂歌を好み伯父な
る初代琴令通舎の門に遊び初号を琴令舎徳雅といつり安政年中剃髪と
二代琴令通舎の号をお継〻して雅海と称し明治の初年藝名芳肆如庵
より三世琴令通舎の号を襲りて松壽連の名を因りて歌堂松壽と改む
明治十六年向島須崎町より移りて後新吉原角海老楼に出縁ありもとて
廓中なる同楼の別宅に住〻明治廿九年十月四日歿し享年八十四歳谷中
三崎北町觀音寺に葬る法号「秋院篤穆及翁居士」辞世の歌に
常形ぶぬ風のさそふま沿てゆく舟は鳥羽野の煙り形もなん

三世琴令通舎庵樂

庵乗は姓板山氏にて通称を孝次郎といふ元は板山某といふ日本橋辺の
高家の男形なりし故なりて吉弟の幇間と形り藝名を芳の家如庵といふ常に狂
流を汲みて狂歌をもむ年廿六歳の頃志ひて廃人となりその内
あらきさに咲く苦を恐れとうとうぬ年形の山
と述懐の歌を添して幇間を廃し古面翁の門にはいりて狂歌を
学ひ遂に三世琴令通舎の号を継て庵乗といひもつ八洲乗といつり秀逸
なりしなる中に
口説りれてさすり焼しく形きたのは年も盛りの質量の客
といつるは最も秀逸といつり老後年齢を疑んと心りかくせしに事果
さりて明治十九年九月九日流り病にかりて俗に歳に享年五十六歳
辞世の歌に

我ら耳の遠き地獄を出きて見へ〜その名所の所々やぶ〜と
淵ふる今戸稱福寺よりの家ふる法号「野康宗」といふ

生 掛 持 吉

生魚持吉ハ今淵横と号ス姓清水氏なりを名竹雅通称を竹蔵屋
安兵衛といふ祖母母邦不よ伝〜偏狐を殺きて業とス本姓栗田氏なり
遠州三河の産なり幼時母を喪ひ十一歳なりて江戸よ来り料屋某よ仕へ〜ら
十七歳の時某殺害ふるよりなり其四年寛永三酉年より先父ハ去ル人
の男の連れ子なりを継母を嫁ら〜男を将来を恐〜其儀ふ家を
譲り継母の意と淵ふせ〜め自分ハ旧幕下石川某よ仕〜ら廿七年の
時世富屋安兵衛の養子と彫り法名武を襲ふ性狂気をぬ〜六月

園の門よりの立偽の制者〜り号て我りなの奏をいゆ〜めて
う〜見れいおをもぬをと松ら校よ〜るを欲〜る家の忌房
と添〜といふ文政元年十月十五歳す享年四十年本心六十自去稱寺
よ葬る法号「徧廓滋悲信士」

生 白 堂 行 風

初風ハ浪華の人なそ〜る淵よ住〜常を懐忠といふ和家を称ミ又狂歌よ
名ありり寛文五年古今夷曲集といふ狂歌集十巻を撰ミ生涯四十年
よ撰夷曲集を撰まんと〜ス〜ス寛文四年十月の比彼〜ら帰星といふ星の
夷曲集を撰まんと〜ス〜ス寛文四年十月の比彼〜ら帰星といふ星の
あ〜を京ひ〜んべの常と〜ふ〜を〜ハ世ままかをの有る兆ふ〜んあと〜と

き

かしまういひなつりしを行風四方にて於安國ふるきちうしまこそ
といつる夷歌を始め十月一日八宮の居所よりまりくふ宮及給ひて
いと奥しなひ時よりてハ夷歌を捧うきものゝと仰のひらるゝとそ夷
曲集を撰むよりつりやんを彫き方人と凡俗の名を文へ紙さんをつくらす
んと宮よりとゝまるゝせしよ宮ゝを我心よ定めかゝしとて内裏し
まりくるよ夷四のさゐたるゆきもたゞ夷曲形れい名家のとおの
ゝよ信すへとの勅定を受けり風い身の西月のみふゝん夷歌ぬゝん
人の未代までの恍びられまゝんぐとて聖五年の冬古今夷曲集を
撰ミ八宮へまりられい家ゝよ天覧よのしとふ今切風ゝ殺年を
詳ゝせんいと惜むゝ

紀海音

紀海音ハ姓板並氏ゝて通称を孝右衛門とゝひ堺ゝ住ゝ人ゝたむ
号を負城といひ始め黄檗山の悟山禅師ゝ親て信と彫り医学を修ゝ
て家ゝ医師と彫り又和歌を学ゝて紫仲所開梨の門弟と彫り紫開
と呼へり又狂言を綴ゝ為絡親と号ゝ戯作ゝ浄瑠璃を作りて紀海
音と自称ゝ近松門左衛門と並ひ立る当時の名人とほれり延享年
始の礼ゝ国扇を見負柳の許へ贈りしゝ

海すきまてぶがらくれい方の物を書ゝをつふうちぶ四忘こ

と負柳ゝうみしゝといふ又京極ゝ紀板近来を作りしこと

知るしらぬ人を狂歌ゝ笑ゝ世ゝその返報ゝ法て為まそれ

と称り元文元年の頃法橋に叙され寛保二年十月四日六十五年八十五
にて殁す大坂八丁目寺町に葬る法号「清源院海音日法」といふ

久鳳舎桐丸

久鳳舎桐丸は浪華の人氏姓蔦山氏にして通称を久宝寺屋徳兵衛
といふ大坂天満に住し書物仲買を業とす其先は楠氏に仕へ兵庫の
役に従ひて戦死せり其子幼少なりしに母と共に摂津の旧邸に隠れ
人となりて宮方忠臣楠忠基と名のり御中の名士と仰られしが後世
を厭て忠臣の門に入りて浪華に移り天満に住す桐丸は其
長男にして幼名を宗次郎といひ性温厚にして年九歳の時師
匠ゆき深田中務丞に就て書法を学び終に其技を究む

又狂歌を嗜み初名を孟遠銀秀丸といひ後に久鳳舎桐丸と改め
しめ別号を三重陽園菊翁といつり蜻蛉館菊丸を師とし後に
継て坊弱丸の社中に客員となり狂俳両道に高飲人の教をうけ
秀和ぶりに元治元年八月雲の門の推挙にて桐舎大幣木賊
庵兎園、豊芝の門良隆、孤月庵自詮等の四人と共に別名三丸の式
を挙けり市場社といふを設てその株梁となり老後仲買の業繁
きをいとひ業を廃して専意とせり書法の妙技に依て衆人の需に応
て真行草隷等随意に今世行はんとく揮毫して身の所の外
とせしかば不知不識終に是を活業とせり殊中性俳の表紙詰
看板等を作すに一流の書風ありて世人是を蔦山流と称して

てよめせり明治廿六年十月廿日歿す享年七十七歳辞世の歌よ

余が子よ名ゝ聖辺の猶りこと今ゝまさるよ我身のうへと形よりうる形

大阪天満河内町真宗円宗寺にて佛葬を営み市外長福共

葬墓地に葬る法号を「釋空月」といふ

玉雲齋貞右

玉雲齋貞右ハ姓雄崎氏にして名勝房通称を尼屋弥三郎といひ大阪阿波堀町五丁目に住し油煙を販ぐ業とし享保九甲寅年秋八月十五日に歿る狂歌ハ八幡豊義坊信海法師の流を汲み藝術廣鳴芥川貞左より信海法師伝来し文墨を譲り受け其業先師の右におよぶといふ意にて自ら貞右と称せしとそ初め定丸といひしより混沌園國丸と称ずるに始め信海法師の別号をとりて玉雲齋と称せり天明年間烏丸光祖公より十数を賜りて師匠せしに公いたく賞せられ玉雲齋の額字を下賜せられしといふ当時門人一千三百余人ありて国基丸と称せる弟四百人に餘りしに高足六人を撰び宗匠と形し六社に分ちて初の月並会を催さしめ貞右こそ初の梅巣なり寛政三庚戌年二月廿四日歿せ享年五十七歳辞世の歌よ

一ゝん八茶に治して而ゝそのちに死せるハ寿命じゃ

大阪四天王寺茶臼山辺坂松山一心寺に葬る法号「玉雲齋昇誉貞右ヱ居士」

編者曰現今大坂より某丸と称する狂歌師頗る多く皆この
貞右の末流にて玉雲流丸流狂歌会といふ月並会を営む
よ僅に居れり貞右の歌は明治廿三年迄は現存せり会は
絶家にて歌といと惜むべきなれども鳥丸家より賜も
りし額を他貞右に送物は本家雄湖市に譲方へ乗く引
とりしといふ不敏の罪及丸流の制古都柳彩相丸より告
越せしこと

由縁斎貞柳

貞柳は藤原姓にして永田氏にて（本姓板並氏）名信未通称を清右
衛門といふ享應三年生る大坂南所堂前に住し鯛屋山城掾と
いひ菓子を販て業とせり又は大和掾といひ貞因と号せり後年南部
松井和泉といふ油問屋にて大和掾の堂を献上へ献進せり故に貞
柳と号せり

月ふけて雲のうへにすみのぼるこゝろ知るやふるゆるんふるらん

と詠しまこの歌大内よりも由緒有と号を賜ありしといふまこ

我が君は堂のまつりの菓子所油煙高とも人いひけり

とうたへり歌は庶幾と称業と称するまつり狂歌は八幡山信濃の

門人まで「ぶつと」といふ狂歌自筆の墨蹟あり

悟りすて世をすまるゝ人なれともかなひらふ歌に死なるいとし

と述懐せし歌よつきて一奇談あれども繁ければ略す

保十九年八月十日歿(享年七十一)浅草大坂五寺町光徳寺に葬る

一説に曰ふ八十百寺町岩槻寺に葬る

俳諧の師匠は負柳(享年廿五)忌(宝暦八年八月)に門人(一本亭芙容花の

嘗ミ建し所なりと墓誌に林孝徳の文あり左の辞世伝説あり

一日居てもおもしろきせよ同花月はまんゐ雪はゆめ

超狸庵都々美

都々美は本姓佐々木氏通称を弥三郎といひ幼時旧幕臣松本某に養

れ生涯を松本氏を継ぐことをなす性敏捷にして士風の窮屈なるを

厭ひ壮年の頃画工国芳の門に遊び浮世絵を学ひて画名を芳延といふ狸を

画くこと妙を得て世人狸の芳延といひ中年吉屋を称して赤坂なる彼岸茶

屋吉田屋宇三郎(吉田楼福住と号し狂歌を詠り芳延の義兄之)方

にかくりうどとなりて生涯絵を以て狂歌を学ひ戯号を

超狸庵都々美と号へり後に浮世絵を廃し名護屋にくり

陶器画をもて活業とし多少財産を得て帰宗し浅草裏田甫へ

狸汁といふる料理店を開業せしに幾程を経ずして接客に務り住

し明治廿二年八月十四日歿(享年五十三)墓中所中ノ心寺麻布町長建

寺に葬る法号「松還院本誉芳延居士」といふ

美圖垣笑顔

笑顔ハ通称を吳服屋甚三郎といひ江戸の人にして加賀町より住し賀物を
業とし性狂歌を好み狂歌堂真顔の門なり狂名を涌泉亭真清と
いひ愛亭と号し後年書舗を開き涌泉堂とはつり生涯世田町より移
りすみ著書自楽也豪傑物語六巻無尽物語五巻弘化三年九月
某日歿し享年卒八歳今墓碑を詳らかせし

南新　二

南新二八姓谷村氏にして下谷徒町の産まれ父八百順と称し旧幕府
医数寄屋坊主組頭なり新二八次男にして春三月と称し若冠の頃より俳
句をなし俳名を布川といひ素行の老々形りの縁物の除は坊主を唐さ

れ〜ゑ上野山下へ男董居をあつて谷村綾左ゑ門住し
ゝて要衆と稱せり明治五年の比南新橋山下日よ伝〜清形岡へ投書せる
に南新二とい小組名を面白ひ〜〜〜清吾の唱采を博し尚時形岡投書
家の第一と數へられつゝ生涯の大形岡、やまと形岡、等よりて爭を
採り谷村流といふ雜報よ一機軸を出し〜渭響酒屋の等他よ及ぶ者
なし明治廿五年の比なり宿を得て後よ立さるをあり久し辭世ふりとて
書附〜組記よ

我死して後よのこるふ志やれから歌ゑ〜ひてきけい者ハこゝろ〜〜

明治廿八年十二月廿日湯島天神町の家よ歿ス享年六十一墓在谷中平
町法恩寺塔中法泉院よ葬る法号「又愛菴宗夕居士」

瑞園千秋

瑞園千秋ハ姓山田氏名正德通稱を伊三郎とい小青山百人町よ住ス
幕府の臣百人組百人まで百人組因ゑり修よ海武府奉行附と行対性風流を
好ミ臣家流の士跡を能くし年を重ねて和歌を嗜ミ近年山の手の工夫と稱せ
よ組記を嗜ミ近年山の手連山椿連ゑり
並稽古よ言葉を潔し記なりとて風雅優美ゑる尚ほ元人
の企及ふ所よなく人言呼一二を左よ記ス

待恋

まつ夜ほの時を空ゑ〜ゆひを組てふ名をハ先よ探ら〜つ

牧三里

又

彫りまゐらせ彫ぶで引牛のいとむ雪いろ々を等り志の留
生絶無くなれと云ふ省く明治九年八月十五日没る享年八十九
青山小町二丁目善光寺に葬る法号「積善院徳誉義順居士」といつり

緑西江

緑西江ハ日本橋通四丁目茅場町山本赤之傍（天徳門都乾）の妻なり心まえ
優しやさしく糸井の業ハ多彫りを能く家の傍らなち絶の業さくる
まで女の身として得ざるほとゝ事彫く又狂歌を好く梅垣俗の仇名
り清流亭、濃の門等の別号あり一年みつらゝ催主を彫りて狂歌茶
会賊集とゝ名を称しまりなる年の冬葬る
さは姫のこゝろのきゝの岩戸霞洩みとり彫ゝ春のまつ宵

と詠しり俗のつゝゝゝ如ハ女の家ありとまれ〜古〜人をゝ人思まれて
いと尊〜〜二慶應二年十月十日没る深川淨心寺地中玉泉院に
葬る法号「西江院妙心日圓大師」

蜀山人

蜀山人ハ姓太田氏よ〜て名覃字報南畝と号ゝ波の毛詩大田の
篇より以我覃（スキ）報（ハジ）俶載南畝（メテコトス）と何ゝ依りてゝ彼りとゝ姓を連称て
名を命せ〜ゝの大江の里、春道列樹、赤と古代ゝ何れど蜀山人の
如く姓名字号を連ねて名を命せ〜ゝの絶ゝ彫〜潤哲の人
とゝゝべ〜寛延二年三月三日牛込徒町の邸ゝ住ゝ父を四智といひ老
役刑裁〜を自得と号ゝ母松田氏ゝ杏花園、石楠斎、遠樹人

等の別号なり通稱を直次郎といひ後ち吉兵衛となる武内山樓翁
先生の門人にして和漢の學修をし性博覽強記にして著書頗る
多し 楢崎茂江の人となり天明風の狂歌流行しを海内を風靡し
四方赤良と戯号したまさに孫悠先生と称し通事奇妙等筆談
にたくみなり 文政六年四月六日歿し享年七十五歳 辞世の歌に
おもきをばかるきつるかと和歌まくらのおのう称
出門白山本願寺に葬る法号「杏花園心通日休居士」

二世 蜀山人

二世蜀山人は姓今井氏にして通称を久右衛門といふ元飯田町中坂新宿
といふ京舗の婿養子にして年南畝に捉ひて狂歌を学びまた画
をかきまた初め文宝亭椒宗と号し後に食山人といひ狂歌を称しまた
また杏花園秀逸は形ちとしいふ跡は師の号を継ぎてまたその弟
子を無数にもの少し俳諧をもまたつくるその連句をもまたひて
者にもまたりとふ毎月十九日杏花園の小集に南畝の書をもふ
その多きは文宝亭かまたまたよりて出世と俳諧をかせる多し
今今の人少きは南畝にづらふ笑をとりて今日は来客の人少き故接
ちく自笑にて需めに應ひ来れていひしとそ文政の始め
ちう法業思ひかたに狂歌の者に京舗を譲りて右三組町に退
しを名を久助とかしまた師の歿後文政十年刺繍して先師の
孫に蜀山人の号を受け後の蜀山人と称し各弘めに書画会を催

して留山人と号し又号の号まて文政十二年三月廿二日享年六十二
歳にて弱冠市ヶ谷佐内坂上長泰寺に葬る法号「大雄蜀山信士」

瓦焼猿人

瓦焼猿人八画伯酒井抱一の姪孫の俗名也抱一八播州姫路の城主酒井侯
前守忠仰の次男にて幼名鶴次郎に栄八忠因と改む性多病のため
寛政七年三十三歳にて剃髪して京都西本願寺文如上人光暉大
僧正の附弟(或八養子といふ)となり文淫暉真と名づけ等学院権大
僧都に任せられしが寺務の煩忙をいとひ去つて江戸に帰り根岸の里
営源に住し室を面白庵といひ営村と号し又軽羽屋又八庭
柏子等の別号あり性画を能くして殊に雅理永徳に能き又高師にて
土佐光貞の門に入て狩野帰の門に入て狩野本の学を学びし江戸
にて八南岳を師として円山応挙を画きしに後に光琳の風を慕ひ学
力俊逸一代の名手なり書八世重堂敬義に学ひ俳諧を嗜み
狂歌を詠じ或ハ雪のいろく降るよ
冨ヶ岳ふる山本といふる茶亭にて
世を捨て山のやく人心をとてまくうきときハどこへ出さの日
と詠しといふ曽て光琳の百年忌に京師小川妙顕寺なる墳墓の荒
廃を歎き自らこれを修復を書しとこれを再興ハ又光琳百年忌及屋形
流印譜を著ハ文政十年十月廿日弱冠にて享年六十八歳築地本願
寺に葬る法号「等覚院文淫」

清水如水

清水如水は東都浅山町より住し号を長根堂といふ雅号を名乗り常に酒を嗜み醉さめては吉原へ通ひ遊びに耽りて家業をおこたりのびのびとして暮らす這ひ居るきりれいとて名附て長根堂と呼つゝとなん（按ずるに雄長ト養又近くは九代の長久法師ふと名乗る人なり名乗りて亦年号なもなれば此如水は名さへ有る人まつわし）如水は居る所大和國法隆寺より藏する貝殻瓢といふ器物を見て後瓢より彫物をする事を得んと常に彫力を用ひて其功器を終始し依て生涯求めるべかりしれいこの瓢の為に身を押へられんとの意よて自ら迷測惜歎彼とて名のりを信ずるに依て此研場といふ所にて遊ぶ人の行よりきて樓上にうをちらかるをなんと

凡あるせいを郭の中にあり其研場用いる陽にてうけ水にて
まるくなるとき海又の辞の意をこめる彩よ

世にすめ我ひとりのみにこり酒碎て帰るまてさふふの水

享保十三年四月三日の彩あきあるく

公事堂嘩地震祈ふり中事晩の飢饉ゴづらひ彩國ゆく
かくこそて四月十五日とふよ暑方刑繋湯にみあと大祈禱を初
まりうるまく終りしとふ享年七十二年浅草金龍寺より墓碑
なり名をとて瓢の形より造立し如幼庵東湖和尚この如水に依後
の証を書れうといつり揺ゝに墓碑より「一陽如臨信士」とある
ハ水と聽四方形ゝが故より其依後の彩を表して殺後文字を如

雖とかくゝ見ゝ形ゝ〳〵

編者曰この清水如行ハ最も古くより狂歌を名所〳〵といへども世に知る人稀なりしかの事跡等を記せゝしもの形〳〵彼の高蘭月岑著「武江年表」及び「江戸名所畫會」等に載るのみ前に記せゝ〳〵略伝事跡ハ江戸名所図会巻の全文に拠治壬辰のとし〳〵この如水の墓を尋ね〳〵に旧形のまゝ現存せりかゝる墓碑の世に百六十五年前（享保十三年）の古墳史実よりかゝる振然たるハ誠に珍らしきものといふべし〳〵因なのに人ハ杖を曳てお掃きつき形り

志賀理斎

理斎ハ姓志賀氏にして名恩字堪通を稱せり印とし後に理助とからたむ理斎ハ其号なり又天離山人、叡北老樵、我乗老人、等の別号あり生先ハ伊賀の産にて名を宗俊といひ天正年中神君伊賀國鹿伏兎越えのとき馳せ向ひて抜業仕せ〳〵仕士のさきに後日あり服部半蔵の組下と形る世より和を伊賀者といふ理斎ハ寛暦十二年十一月十日江戸に生る幕府に仕て伊賀者より後年大城内金蔵の勤め廩米三百苞を賜る祖先以来未だ有のあせまて一家の面目といふべし、後年仕を辞して諸國を遊歴せること十八年にあるふたの性滑稽にして狂歌をよくしたりとゝ〳〵岩川寺蓋寺を田舎山、山年山、の差にまうでお

朱墨を東西の白を思ひとゝせて

山を頭を崩れて見れハ出さるり北を形れハ南を形〳〵

江戸の花敬〳〵跡を南よりとふてをいろをかを形〳〵

と称〳〵をを向け〳〵といふ天保十年の冬未記といふ和尚を祖先自ら

法号を「元是隗不生不滅居士」とつけ

見ることハ方寸のをゝこゝを居〳〵りふさそうつれ三毒の苦さと

と称ス聖三天保十年四月十日享年七十九歳にて弘化駒込吉祥寺塔

中洞泉寺よ葬る、墳墓の傍よ理翁ら自筆よりける未記の

碑あり表面よ閻王人魂を見て驚くさゝの笛を彫りて左のかき

和文なり

我泉世界と形りて閻王宮よいてゝん時大王曰汝何志そいつれそう

来ると問ふ〳〵答て曰ちんよい理翁我等が志賀氏の生れ之毎

よ呼れて世よあてゝ見れハ天地乾坤混沌未分大よ世界よ生ふ

そこて海世をつ〳〵のつい

見ることハ五蘊のをゝこゝを居てふふそうつれ三毒の苦さと

志賀理助といふハかりの名ゝを本名ハ

元是隗不生不滅居士

隗号を用ることを僧礼の器を為ゝ〳〵る麻のもゝ和ゝる毎ハ

けゝものとを〳〵れ器ゝ〳〵ふ〳〵屋とをあとをゝ金とをあ〳〵

天保十年己亥十月　七十八翁　天雞山人理翁誌

心とゝんふらのまそてゝうくゝんこんふらのまそてゝうくゝ如らん

とゝうこの狂文をゝても渭稽家〳〵〳〵をゝ〳〵ぐし　著書三十餘種

ゝゝり理高隨筆最も世に名をゝ

十返舍一九

一名　叡北老翁とも

我朱多老人とも

十返舍一九は駿府の町同心重田貞の子の二男にして幼名を彦次郎といひ

後に彦七と稱し名負一、辭高と号し寛政年の頃小田切侯に仕へ坂本大

坂へ二度〳〵と彼の地の浮世繪作者と交り近松余七と稱し寛政六年

江戸に來り十返舍一九と号し双紙渭稽本を作り大に世に行はる十

返舍の号は一九初め志賀理流の香道に志ゝ〳〵黄熟香の十返をと

りて斯唱へ〳〵を戯作の名にも用ひ〳〵し著書頗る多し　といへども最

も渭稽物をよく〳〵と云ふ彼の膝栗毛の如きその伎量を考へるに是ぞ

奇行逸話多くして多くは世人の知る所なれば爰に略す文政天保

二年八月七日歿す享年六十八葬浅草永住町（俗ミドブ店）善龍寺墓

中東陽院に葬る法号「心月院一九日光信士」辭世に

この世をばどりやおあとはよいとやさ　南無阿弥陀佛

式亭三馬

式亭三馬は元板橋宿地蔵坂兵衛の男にして通称を太助と云ふ幼時茅

場町の伯父岡屋西宮新六に仕へて書を學ぶ山下門外なる書舗

家屋を次在宅つの婚養子となりしゝ其妻の世をつくせしゝ難縁
して石町に移りすむ牡丹は其頃より世に秀吟なり浅草市町辺月
へ其庵を開き自製の江戸の水といふこの世の妙なるよりてもてはやされて
頗る切れしゝ三馬の号は唐来三和の文を美し烏亭馬琴に忘
形の友とせられしゝ三和馬琴の一字づゝを取て三馬といはゝ
ふ本町庵、四季亭、酒屋二翁、咬喇哩横、滑稽堂、等の別号
あり著書多きなれと就中浮世風呂、辰巳婦言、ふと最も世に名
高しまた後年牡丹鶴数編を著し文政五年閏五月六日享年
四十八歳にて歿せり辞世の歌に
善もせず悪をもせずに死る身は地獄もほめず極楽もなし

深川雲光院墓中に法源院に奚る法号「觀誉春水善天信士」
編者曰三馬の辞世とて世に伝ふるしゝは前に記せしごとく彼れとこの辞
世の歌に異なる所あり往年柳塘翁見境内に一の碑ありその碑面
に三馬の筆にて
善もせず悪をもせずに死る身は佛もほめず閻魔しらず
とありてこの歌の仮名は須藤田宮といふ医師にて三馬に筆をとらせ
て彼の墓内へ建しゝもの歌に三馬の言名歌にまよふ世人深くも
あぐまず三馬の辞世歌にと誤り伝へしゝと燕栗園の物語りしと
成書に見えしゝ編者この碑を板島翁に見境内に探りしゝ外と
ゝは絶てなしゝ燕栗園の物語りしゝ曰くふふは須藤田宮といふ

医師にて庶を刀にておを出とられしとゝふ庶子れ

苟笑亭長根

苟笑亭長根八姓菅原氏にして本所弘化七世の孫之幼名を三吉郎とゝ称し後に次郎吉郎門と通称ゝ三郎兵衛と号ゝ下谷三枝橋のほとりに住し鑒刀を以て業とゝ三枝亭、潛亭、牧迂、苟の号有り狂歌を以て柄号打よ学ひ洒落袁成とゝなりし後に号打らり七十三の名を受継き戯作の著有り出れとも世に知れ故に苟笑長根と称し剃者と形りて狂歌を作らゝゝ弘化三年二月十日歿ゝ享年七十八葬谷中三河町妙法寺に葬る法号を「円壽院光恕」とゝふ

紫檀楼古吉

古吉ハ姓篠島氏にして通称を古吉といゝ吳服島白銀町に住ゝ元赤大工職形りしゝ家極て貧しゝれい羅宇竹のそげ替をして世を過とゝ雖れとも利欲を思はゝ風流をなして生ゝ近隣に住ゝる六樹園の門人等と交り狂歌を詠して楽とゝ妻との中に三人の小児有れとも不幸にうとりれハ赤貧に陥ふが如く朝夕のくらもふ自由勝なれとも楽とせゝ云まゝ有れハ狂歌を詠して友達の家に遊ひ酒に酔ふ事ありしを嘉いうきを思ひて諫むれとも耳もかけすれい遂に離別をなり古吉ハ優ふ形る第まるてとりて

風のほりせき茶巻さるきてハさてゝ氏る作の形さ式ほさん

と白紙ゑ詛めく去怯よかつくなつさへられい書い果れて物をこいさび爲
めふひ居さまに古去の友人百銭猫四郎といふ者去伝れ来り離別の
狂歌をうたてひすすぶに感賞し蔦前の十八大通へ委しく物語りくるゑ
家の毒のと形りとそころ祢なるまく集めて古去の許へ帰りしといふれうさ
免元の如く支服中ちく暮せしといふ又或は情あるく人の助けゑちうて西瓜を
買出し赤りて販き居りしゑ人の老人いう来りて西瓜の味ゑいききたい
きつたちより呉ることひりるゑ古去い庭子をきて西瓜をたち割りるこい
まぶ熟さぬゑ中の白うりれい彼の老人是を見て諸ゑ未熟の西瓜
ありといひるをいうに買ゑん古去い額の汗をぬらひて
ひき形ひとまく生形りの西瓜とそ爲ち割りれい中のきろうと

と口呼みりれい老人ゑすらい感伏しを南鐐一ひりうて西瓜ゑあうべ
び立ちりしといふ又いるあるい冨士ゑ茄子の絵を売りきてそふ人
ひれい誰ゑもひりうしとそこ生画の賛ゑ

功を形す。お世ゑるかの冨士の山ゑあるき形ひもう形ひあ全

ゑるひりる時ゑ雅号のすけ碧の荷物を背負て八丁堀を通りしゑ
る医師の家ゑ呼ゑれて女房の煙管の雁字のすけ碧を形せしゑ者
出ゑたりこそその煙管ハ医家人のゑの形れい息を吹こそい形ふ
の位ゑすけ碧おいぶそその位ゑそころしといふ古去是ゑを思て快ふ思
ひ腰の矢立を取出し一首の狂歌を書て煙管ゑ添て差出し價も
ゑふ立ちりしゑを見ふきゑれい

牛蒡の苦孫あるうら田野造のうれをむすてとおもひなまふハ
とはるとれいさてもの性の羅宇屋う形と恵よ跡追うけて以庵〜價ハ
ゑゑう外よはやきうづけ物〜ことさて今の迫形こと語てあひをそれハ
牛蒡と之〜ふ云う日う皆買〜前よ振もはりさ以抵もあり
古蒡こあ迫形よ取入りてはつく礼を述て云物〜とふ天保三年十月分殺
八享年六十六深川寺町云信寺よ葬る法号「蜷迫浄運居士」とふ

質亭文斗

質亭文斗ハ姓冨村氏より之渦屋善五郎と稱し江戸市谷七軒町よ
住〜質物を業とし故よ質亭の号ありて狂歌を詠て山の手側よ世
ゑ〜る俗志と弘化四年二月市谷兎ヶ岳八幡宮の境内へ自詠の歌を

彫りて碑を営ミ建りその歌よ

王と形り懸とありても一生の苦朱ハ面形〜苦よこそ行れ

嘉永三年七月廿三日享年八十二歳中よを殺せと四谷寺町蓮乗院よ葬
る法号「常照院質底菓量居士」

鹿津部真顔

真顔ハ姓北川氏より通称を嘉兵衛とふ江戸駿河屋町屋よ住し
汁粉餅を販きて業とし傍ら衆主を勧む天明年中恵川妻町を
師匠として若俗を形〜恵川好町と号〜しかるその若俗世よ以れ来
り得る業形ふ祢ハ早く是を廢〜狂歌を学ぶ〜習山人よ
就て新道を究め初号を麻深亦真顔といひ寛政八年二月年門

とり四方の姓と共に四方伽藍の免許を受け牡丹堂を真顔と称し
後に牛門牡丹四天王の寺院に数へらるるまで自ら毘沙門を中興
せんと願ひ出でて京師に登り法王を求めて芝山若干人、富小路貞直々、
あとへ伺候せしに法名を授けて埋火とふ堂塔の額あり、れハ
真顔とりかへて

法神にまさりて形ちと埋火のまい踏形ハおろしてきたの

と称しまこの形雲のうけ格とありて遂に文政十年五月二條より宗
匠の号を免許せられ毘沙門形場四方赤顔と称す世に文政雨と云ふ
毘沙門とふハ赤顔を中興の祖とせ〻すれば形の点料を百首
まで張一両と定め是をもて法業とせ〻とふ往年まハ名ある者制者

ゆうゐ法國に最も多し〻山陽堂の若牡丹年代記に四方伽藍
作者を日本全國絵筆に〻もの〻〻

大人形きハ恒要ものきに金山海硫黄ら島に女護鍾唐

と載せ〻〻とにもこの雲ん形り〻を知べし 始れとも晩年に〻ものを
いさ〻零落を極め麻布毘沙門前激辛子丈りに食客と形り
といつり文政十二年六月六日歿に享年七十七歳中岩川三觀坂光円
寺に葬る法号を「毘沙門形場壽誉福阿真顔居士」とふ辞世
の形に

味くらひ暖く若て伺ふ是 七十七南無阿弥陀佛

真顔の二條家より賜り〻〻宗匠号免状ハ左の如〻

四方孔垣

不泥詠之徒諸孔者不學而以
則于家流之旧式矣可謂古今之
奇也感賞之餘因推授宗匠号
益愛徒尊以宜復古是道者
台命如此依執達如件

土條殿家司
従藤木越後守奉

文政十歳次丁巳十月廿日

大村監物

折烏帽子
仲平 色目 柑樋
菖蒲袴 色目 黄

右風流今帝尚在之者可
若之其餘者用之儀可
五時宜以事一依

台命如此件

大村監物 花押

文政十歳次丁巳十月廿日

藤木越後守 花押

台賜

孔垣宗匠

初代森羅亭万象

初代万象ハ名医桂川甫周の令兄ニ名中良字廣長通称万蔵と云桂
林と号ス築地居住ス故ニ森島氏を称し甫周と云て平賀源内の門下と
なりて森羅万象の号を譲ル狂歌ハ古くより流て狂名を竹杖為軽とはべり
後年二代目東山人と号ス学問を好ム蘭学を究め著す所の書数十部
あり万国物語、紅毛雑話、地球全圖、など何れも有益のものゝ其性人
よりつふとを嗜ミ又性として戯言をもて人のあとうひを解くとあり一日狂
歌堂真顔の家を訪ふ真顔白ゝこの程久しく見えぬもてなし
せさせのひゝそゝいひ入れ方名の白此ハ南国湯の娘女なりて俗方
よのみ面ひ続けゝる故ニ〳〵訪ひ来るゝ〳〵せぎり〳〵まづ二ヶ月まゐり

よ二尊ほど貴しゆとしひろう志願発てたゝ佛よ大金あり然るゝ
いと多礼那るゆゆるれとすほとと大金在おゝゝゆんとゝ今ゆて方ゞけた
二尊とゝ餘りよ方ゝ云ふゝゝく学たゝいとしひろる時万象若て賞よ二尊所
ゝゝよ行ふた二尊とゝ本尊おのゝもとゝひろれゝゝ志願を照ゝゝどつと尊ひ
ゝゝゝそ門人七宝万宝よ万象の号を屬り生身ゝ薩善ゆと戯号た
又文化中ゝみ本の俗よゝ亡師の戯号を用ひ初内鬼外と称せり後年
志願と共よ俗諧形を学つゝ森の性亭の森の一字を許しあゝゝ竹
卯ゆゝゝ行ふ文化五年十二月四日歿た享年詳ふゝたせ二尊後上切寺よ
葬る法名詳よせた

編者曰森羅亭万象ゝ名ゝゝゝゝ人形れとを歿年月詳ませた前よ

記た逸話ゝ定器の著聞集ゆ載ふ所を学ゝゝゝ狂歌年代記
よゝ文化七年十二月歿ゝとゝ行ふ編者上切ちゆゝて墓碑墓誌
等を調ゝゝれとゝ文化五年よゝ月七年よゝ月ゝゝた桂川氏
の墓ゝ行ゝれとゝれとゝあゝゝゝき志墓と形ゝゝ森島
氏を継きゝ白氏他ゝ墓ゝゝゝゝゝ行ふゝゝゝ狂号ゆゝ

二世 森羅亭万象

二世万象ゝ初島屋仁左ゆゝつとゝひ桜田善吉ゆ町よ住ゝゝ業よを販
て世業とゝ初め七孫一万宝、南洲よ、鶴雪庵三雅号の号行ふ初代森
羅亭万象（森象南洲）を師とゝゝ狂歌を学よひ傍ら戯俗の著行ふ
後年ゝゝ森羅亭万象の二代と共よ俳枝の名狂の狂号を号ゝ

といふ天保二年七月廿六日弘化元年七十四歳にて西本願寺境内妙
延院に葬る法号「釋象運信士」とふ
編者曰この仁左衛門を三世春雄亭といふ人物れと識仏者にして
三世といふを理会せざりしに狂歌師にして二世にて多論あり
最初春雄亭の号は平賀源内なりしを春信南これを継き
二世といふもこは戯作のうへのみにて狂歌まは春島南これを初代として
世を学ぶ福島仁左衛門は二世春雄と論あり是も人この理を忘
るべし

真中條春芳

真中條春芳は姓名の姓氏なるを通称とし屋号兵衛といふ江戸吉原
島白銀町に住し煙管を張ることを職業とし六樹園の門人にして別号を
金亭といひ墨絵を能くしたりと秀れ或は深夢に和歌をよせて添
川へ四きりしたる人の三ツ子姿を墨にて画にしてさしあせしを
春芳こは〳〵をうとめて笠のふちうちにかすかすとそのやうに咏り
四五年を経へ四きりしたる年月にして河童頌を示作りて死したり
といふ載て水滸伝より弘化四年四月十日弘化元年八十一歳
浅草松葉寺境内延命院に葬る法号を「宝願浄生信士」といふ辞
世の歌に

ころもんの九九の数ほど生のひて極楽へゆく勤行もなし

全交

芝全交ハ姓山本氏ニシテ通称を藤十郎ト云ヒ西ノ久保神谷町ニ住ス水
戸藩ノ人ニシテ大蘆流の狂云師ニシテ頗る文才アリ性滑稽酒豪ニ
シテ戯作の著頗る多シ寛政年中ニ多く双紙の作者雲の如くおこれるを
山東京伝ニ及ブベカラザル才アリシカ只僅ニ是ニ頡頏セシハ全交ニ止マリ
シト云フ寛政五年六月十八日歿ス享年五十餘ト称ス

尚左堂 俊満

尚左堂俊満ハ姓宍戸田氏ニシテ名ハ俊満通称を易兵衛トシテ初ノ
時ハ呉服ヒ伯父某ニ養ハレテ人ト為リ小伝馬町海岸ニ居住ス
シタルニシテ国を使ニシテ自ラ尚左堂ト号セリ初メ椎取魚売
の門ニ入リ板木の彫を学ヒ春潮と号ヒシカ後川春章の門ニ入ル

うんと疑ふを厭ひ終ニ俊満と改メリ中頃小尾重政ニ深世画を
学ヒシカ狂歌ハ六樹園の社中ニシテ伯乗翁の別号ニシテ又戯作を
ニシテ狂名を南陀加紫蘭と云ヒ曾テ四方院前那る猫の家屋の
を絵ニシテ通ひ久リ猫のうぶごられと云ふ外ニ数多お板せしニ大ニ世ニ
行はれシカシ
夜ふの梅花ニ房ニシテ女房ニ引ひけどき袖のうつり香
と云ふ歌ハ最モ名高キ秀逸ニシテ人の知る所ニ文政三年九月
廿日歿ス享年六十四歳浅草黒船町正覚寺(椎寺と云ふ)ニ葬
る法号「善誉尚左俊満居士」

初代 絵 馬屋 額輔

初代額輔ハ本姓松下氏ニシテ赤坂一ツ木（泉屋党ニ属）の家ヨリ出ル幼名を虎之助とふ後ニ賀久輔と称ス初代ハ斗屋の兄ニて素より猛男子ハ松下家をお継ぎなされと幼少より高尚のこと好きをいとひ青年ニ及ぶ嵩谷の門ニのりて画を学ひ画名を嵩濤といふ後年小窓翁一牒の画風を慕ひて生涯意を専ら英一蝶と号ス又朱乗芳江の門ニ趣ひ狩野を極め初号を竹雨庵絵師宗云といふ故ありて英田氏を継き伊義前書醫役の株を買求め渋谷村橋ニ住ス この時渋谷ニ住む故をもて觀世音の絵ヲ多く画て絵ヲ屋額輔と号せしとふもそ又自ら画き自ら賛ヲ画賛人といふ別号を画賛人といふ老板六籍園の門ニ趣ひ中連の輩首ニ立ち毎年二月初午祭り自画賛

のち絵を居住地の稲荷の社ニおよかゝるを例とせり 安永七年の夫
年ニ病の床ニ臥し終ニ絵の画賛の筆ヲ絶つ 笑の序
ニ

おもふ古き絵ヲ屋の額輔を見るとてうしがおもふ初年
かく迄て四年二月廿七日享年七十四年にて弱ル辞世の歌ハ
麻衣のみて果中せとなれ々ゝ型ニハ生ふ芳泉の宮
芝三本榎 浅草寺ニ葬る 法号「英豊院 釋一翠居士」

二世 絵馬屋 額輔

二世額輔ハ本姓田村氏ニシテ幼名を貞治とふ文化四年十二月十日
麻布部谷ニ村ニ生る父を失ひ十三年のとき祖父よりいとふハ

れて金沢へ移り住む天保七年十六歳にて初めて江戸に出で麹
町平河町住醤屋某方にて奉公す年季を勤め弘化
二年雲州侯の藩中坂本某の養子となり坂本甚右衛門と称し
赤坂田町へ家を求め古手の業を営む嘉永四年鶴巣居と号し人
のすゝめにより狩野家に入門し初めて格庵貞丸と戯号せり
同年十月初代狩野屋の門に入り至庵貞丸と改めしが同七年
四月師匠の免状を受け安政五年四月先師の号を襲
して二代の絵師屋額格とよび別に抜屋の命を保ち名を
明治十年武州日野の里人中村氏より絵師屋の号を譲り画賛
人数名と号したる抜屋の事果て後幾年ありて金沢にて

故々敬坂へかゝまゝ立彼の地の親族等へ種々の土産を添て帰り居
るまゝ左の如き歌を詠めり

まちこゝろ時なるふきのやせ芋を磨きて宛くふるさとの門

かゝて慈しむ祖父母及び父母なきの墓参りとして恙なく坂東に
坂詰内の名所旧跡を尋称風月を友として老を忘れ居り明治廿三年
八月十九日享年七十歳にて弱し四谷南寺町法恩寺に葬る法号「頌
心院法賢日翁信士」とふ辞世の歌
黄泉の使まゝ女て掴りつこれやうきりの命毛の筆

元杢細

元杢細ハ武蔵國松山の産なりとつくる所なり京橋小舟屋町より織り湯屋を業とする姓浜辺氏(或書ニ小川氏又ハ金子氏と記せり)と称されとなん山覚寺の辺去性ハ浜辺氏と称れハ是なり浜辺氏と称れハ是なり通称を太郎兵衛三郎といひ後ハ平七と称ら〻生性風流を好み國学を修めやゝ和歌を能くし画ハ高嵩谷に学ひ画名を嵩松と称す常に四方山人の等記せり物ハ杢細ハ古き男子すみをぬきう所なり常に杢衣を着し紫の服紗を佩くこと物を習慣て居りきとり(中略)杢細ハ幕府を二度湯がきし所なり彩り云ことなりそのまゝ恐ひ居るべし

寛政三年五月廿一日六十一歳にて没心〻て直切工人の二才子と彩り殊

東京都立図書館

阿弥と称せらるゝ時上人より賜りし衣に

頭ひえしるり法衣ふかりてさるゝ心をすゝきの袖

垂綱の返しに

頭ひえて心をふくハすみぞめの袖をぬらしゝを涙まされる

又まみだ川永郡の森にてかしらをおろして

ほふらうハころもをそめつ墨田川ながれながれて世をながらへ

おなじ時辞世の句とありしとぞ

我か年をかくきすゝみさらハとてうつゝんけてそうこぼつゝ

寿阪西久保神谷町世をのがれ住とあり饒舌録、詞の栞、ぬつさ考、須のさきこ、玉のをしろ、筆の若菜書皆世に行れたり明年浅草花川戸に移りて文化八年六月廿八日享年八十一歳にて深川一万年町正覚寺に葬る法号「心性院琢誉珠阿弥陀仏宝山」

初代浅草庵市人

市人ハ姓大垣氏にして通称を伊勢屋久右衛門といふ浅草田原町通り角東仲町に住し質物を業としかたはら狂歌を詠みて壺側の鮮首たり蜀山人と深く交り名声世に顕はる常に平曲を弄ひて琵琶を弾けるに好子の名高り別号を巴人亭、壺々陳人、といふ後年庵を墨田川の下流に移しさらに世俗のがれて墨田と号けまた後都只言園と改へりこの号ハ文化十五年のまゝ宗師※泉かより市人に自詠の狂歌を進むへきよし執事且上に膳をとりて仰せられたりかれハ四季の雑

の社頭三十六首を短冊に認め進せしに泉少將感じて感
賞しのひて額面書法の家柄なれば今此中將宗成朝臣に都鄉
園といふる額面の深草をえらびてもらるべき人に賜はりしとふ
こは京師にまで名のひびきしといふ意にて斯花に名をきこえ
居たるものなるべし或ときに
春の日のこころをそらに水ゆくさけとふますら養老の瀧
といふ自詠の歌を石に彫りて弟慈の菩提寺なる建仁寺に建しとふま
た
わくきはに形ぬをぬ猶しまうちは世のうきぬ四耳とこそあれ
この歌は得意とする自詠にて世に名高しとの政三年十二月廿九日
享年七十餘年淨土松清町（元寺町）大松寺に葬る法号「隆山居士」と
いふ

三世淺草庵春村

三世春村は元姫路門守の家臣にして姓黒川氏之通称を治郎左衛門といひ
後に主水と改めしも知名を勘吉といひ江戸の産にして淨瑠璃田丞町三丁目住
し本所小泉町に移り又大徳院前に住居し芳蘭、芳の号あり歌
年の頃より國学に志深く師に就て学ぶこと久しく國史に高き歌集
物語、源氏の新註に精なりて後に著書に専念を忘れず猶学の
功をつみ最初は蒙に世に流れ世に淨瑠璃を称し二世淨瑠璃庵守舎に三世
の号を受し後に添削等を務せしに敬愛を務し和歌をのみ

詠しうる年七八に及びて学をさゝ不要と形しやう国学を倍め将谷振高よ
就て真学を質し生徒となりしが清水濱臣、岩本田豆流、村田子河、
北静庵、伴信友等に、春村の説大約本居宣長の説よりしといふも亦
代の主を論らふに不礼なりとて是を学ばず只吾嶺の事を就て詞の栞若干巻を
著し生徒詞を係る著書なまつ所り漢字三音考の粗略なるを惜しと著
敬考語を著せり又百葉略解の遺漏多きを歎き一万葉集墨水抄を撰
録しなる成功はいふに及ばず春村翁の風をぬすみ名を知らるゝを
厭ひ權門貴顕より招かるゝを病と称しなさりしとふ男女四人の子所
しる或は嫁し或は他家を継き家るは門弟金子真秋を義子となして家継
せり真秋学識世監の誉れ所りて家名を墜さず黒川真頼の名今

海内に響る春村翁庶二年十月廿六日歿に享年六十八年浄土寺に葬る法号を「東風院道秀芳蘭禅士」
宗久町永見寺に葬る法号を「東風院道秀芳蘭禅士」

四世淺草庵仙景

四世仙景は名高氏にして名廣道字子田通称を弥太郎
と称し輙家と号せり又初め山人招福扇とをいひ世と尾州愛知郡熱田驛
に住し熱田神宮領の里正なり仙景幼時熱田の神官砂部政春に就て句法
を受け成年に及びて宗和中納会を仕て俳諧の流制を学び又離屋(まがきのやの)宗和
に従ひて俳諧を学び四世浅草庵の号を継続せり生涯不幸にして家運
おとろへ産を失ひ江戸に来り戯作を為して世を送れり戯作は初代柳
亭種彦の門弟にして老境なりし〜寛政に寛政せりといふ慶應四年二月

九日歿享年六十三葬本所中ノ郷原町本願寺ニ葬ル法号ハ
「忠山宗儀居士」とふ

五世浅草庵維平

五世維平ハ姓吉野氏ハ通称を伊平とふ江戸の人ニ若年の頃より文
学を好ミ十三才の時三世春村の門ニ入り国学を修め傍ら和歌を詠し
綾村と号ス師歿するなり井上文雄の門ニ遊ビ和歌を学ビまた詩
文を能クス歿後の門外人の聘ニ應シ仮名野史の編輯ニ従事し
天保四年宝化野史と号せしめ資金ニ応シて家産を傾
ケ又祖ふく宝化社を興ス蓋シ宝化野史の名を存スル為ふりてな
ほ雅社徒を糾合し和歌國文を監ルまこと五葉世野史ニ入り悪ろて

東京橋原製

宝化野史の祖者と称ス明治十二年の夏墨川春村の義子
真頼のすゝめにより五世浅草庵の号を相続し和歌の判者となる
又俳句を嗜み芝逗雀の号あり正蹄ハ俗語ハ雪城の弟子ニ
頗る風韻あり著書ニハ字考俗字格、冠字考、女子文例等他ニ
あり

藪里の花ちるめをとゝ〜昂ふらんはのうゑふ〜〜山寺の陰

とふ歌ハ風雅社命ニ委任ニて著名の吟ニ晩年眼病
を煩ひしニ成る時友人ニ傍ち れ元八幡とふ所の樹を尋て詠し
歌ニ

低うのみ咲めとゆて聖ても称ふ花とハ見ぬ人しさ

明治十九年六月六日久松町の東に移し建て寺号を天王寺共同墓地へ神葬をもとして葬る

梅檀二葉

梅檀二葉ハ姓荒井氏にして又富士とも名雅亜字を松通称を雅屋文四郎といふ武蔵島の陶器商信吉屋某に寄宿中狂歌を学び別に六樹園の近隣に住居せしをもて門に迎ひ和学と狂歌をまなび別号を六果園といふ又壽松軒、南山人、等の号あり天保の始芝宇田川町（日蔭町通）に住して狂歌を教て業とし狂歌ありし吉原江戸町二丁目大黒屋藤助（甲子楼）といふ妓楼の主人とありしか常に狂歌を誦して互に補佐せるを久しく為て世に遊び漢人江芝閣

東梅原製

沈萍香、陸三品、楊覺三、等と交り倭歌の風調を学ばせしに漢人詩を賦して是を賞し覺三別に詩を作りて梅檀二葉の号を贈りといふ歌に曰くあり中に

日の本ハ天の岩戸のあけしより女ふじてい夜の明ぬ國

といふハ皆人のよく知る所なり安政五年九月四日歿し享年詳ならず法号山谷吉聖信（旧野鳥哉）安盛寺に葬る法号「生義院二世日松信士」

千柳亭唐丸

唐丸ハ武州仏基庵の医官彫り源姓にして名弘景字を徳通稱を即休といふ其先ハ清和天皇の商孫近江國の住人綿織判官義秋なり世に綿織を云て武士とし六角園の柳亭といひ又一休の曙鶯の戯

れうりあて悟容人といふ戒号あり又象の下まお對しを大ふる黒子あり
をもて雙星ともいふ号せり於朝三亭、茅山人、等の号あり文治年
中より連綿として医を業とし性狂歌を好み三酡羅法師の門より
のり授よ文泉舎法盤といふ者よ屋敷の名を譲りて師弟の和名を継き
一葉と改めしら又授よ西園寺といふ者よ譲れり天保の和年
正三位千種有功ゆより
この葉の言機たて織りて世渡こを錦もおのうまるよ
といふ歌よ添て渡こといふ名を賜ちりしといふ屋中よかけしよ柳
亭の額ハ蜀山人の筆形りとそ伝ふ歌ハ狂歌の内よ
浴室に古鏡を盗み去りし者あり名れい

東京原博士蔵

形のごとかしまかしかふ形風流の歌ふ紀屋そ住こかりり法
とよみしといふ世他世よ世えしに秀吟せりこれ元治元甲子年五月
五日享年七十二歳にて歿れ仙巷ハ巡礼(今井寺小路とふ)西泉宗昌
茅山林松院よ葬る法号「無何有院柳翁離塵居士」

東京 横尾製

國學院藏